

金澤墓誌

加越能史談會發行

金澤巖誌

金澤墓誌

和田尙軒君市の市史編纂の任に膺り、拮据年あり、其の幾部分は既に成る、今其の暇を以て、金澤墓誌を纂修し、予に昧して序を需む、惟ふに編修の業素より容易ならず、資料を採集するを最も難しとす、而して之を採るに法あり、之を集むるに道ありと雖も、一半は手に憑り、一半は足に待たざるべからず、汎搜博渉、宜しきを取り、否らざるを捨つるが如きは、手の用に屬し、往訪踏査、正しきを採り、否らざるを斥くるが如きは、足の用に係る、君恒に手に憑り、足に待ちて、勞を辭せず、今成るところの墓誌の如き、君に在りては、蓋し緒餘に過ぎざるべきも、以て其の足に待つの證に當つべし、君は寺刹に廢冢を尋ね、郊邨に荒墳を觀、以て顯幽の材を採り、立傳の料

を覓む、他人之を忤らす、其の好事の甚しきを視て之を誉り之を嗤ふと雖も、君特り此の如くにして史實を究明し、心私かに何物かを得るを努む、之を彼の窄室隘屋の中に籠居し、故紙堆裏に没頭して、徒らに前人の録するところを踏襲し、誤れるを正さず、遺ちたるを補はず、遂に其の範疇の外に出づる能はざるものと負に其の選を殊にす、古より江戸に浪華に平安に皆墓誌の類あり、史乗の缺を補正し、史實の幽を顯聞すること少からずといふ、史談會が屢年探墓の舉を數たびし、君が今復た墓誌を纂修したるもの、豈徒爾なりとせんや、因りて懷ふところを叙して需に應ず、

大正八年六月初旬

金澤市長 飯尾次郎三郎

近日墓石の調査及保存の事漸く世の視聽を動かし來り廢殘の石再び立ち湮滅の跡大に顯はるゝに至りしはこれ斯道の慶事にしてまた故人に對する追遠の情を篤うする所以なり先年野々村宗達の墳墓が金澤市内に於て發見せられしが如き即ち其適例にして直に保存法を講せられ今や同市勝地の一となるに至れりこの宗達墓石の發見に功勳ある和田君は更に進みて市内及附近を踏査し苟も由緒ある墳墓は盡く之を載録して金澤墓誌の名を以て公刊せらるゝことゝなりぬ本著一たび出でば世の考古癖ある者をして歡喜せしむるのみならず地下の亡靈をして世を隔て知己を得たるに感泣せしむるものあるべし果して然らば君の勞苦や大なりと雖も聊か之に報ゆる所ありと言つ

て可ならむ余嘗て親しく宗達の墓に詣して保存の途着々緒に就けるを喜びしが昨冬會ふ事を以て越前福井市に抵り岩佐勝以の墓を興宗寺に訪ふ時に天陰積雪數尺墓は本堂の右側に偏在して空しく軒滴の打つに委するを見て彼此量較感慨措く能はざるものありき翻つて考ふるに名繪師勝以の墓にして猶ほ斯の如し況んや名聲の彼に如かざる者に至りては風饜雪虛荒敗に歸せむとしつゝあるものそれ幾許なるやを知るべからずこれ誰の罪にもあらず知られざるに由ること多しとなす余の郷里金澤に於ても亦然りしなり今や和田君の此著を得て眞に暗夜に光明を照らすの感あり冀くば之によりて墓跡展拜の念を煽り延いて保存の思想と事業とを啓發するに至らば調査の勞苦に

對して愈々報ゆる所あるのみならず故人追遠の情に深厚の度を加ふること計るべからざるものあらむ本著の發刊を祝して一言を題すと云ふ

東都礪川の僑居に於て

大正七年一月

中川 忠 順

増訂墓所案内序

達而顯者。不必賢。窮而隱者。不必不肖。窮達在於天。不係賢不肖。然而達而顯者。史籍錄。口碑傳。聲名遠播。人人知之。窮而隱者。其

人雖有才藝。包藏韜晦。不自銜耀。其事隨湮滅。乃闡潛德。發幽光。以表章先賢。非操觚者之責耶。墓所案内寧略於彼而詳於此。亦宜。且夫崇敬先賢。私淑而仰慕之。知其事。究其墳。焚香以拜。亦爲訪古之一端。徒思不如覩面。空想不如接境。而弔墓者。或其歪者正之。仆者起之。圮者修焉。蕪者治焉。不俾先賢遺迹埋沒於寒烟蔓草中。亦爲仁人之美舉。禮所云古不修墓者。不可以通於今。墓所案内之作其可以已耶。和田君尙軒遂於史。而特詳於石川縣事。頃日增訂金澤墓所案内。付諸手民。屬余序。金澤爲余桑梓。深悅其舉。乃不辭而序之。

大正戊午一月

柳下 永山近彰識

序

人間の肉體は大海の泡沫に似たれど、其の生命は常住不滅なり、古來偉人傑士の一舉手一投足は、直に宇宙の無極に波動を現じ、乾坤の長程に痕跡を印せざるなし。たとひ骨は地下に埋められ、墓は蓬蒿に没するも、社會に盡したる功績は燦として人文史上に輝き、來者に向つて垂るべき模範となり、人生源頭の活泉となる。之を追憶して其の性格行藏を考へ、以て人生の責任を識るあらば、修養の途多岐なりとはいへ、尤も有効の方法たるべきなり

畏友和田尙軒氏、南船北馬の勞を辭せず、東探西尋の苦を惜まず、幾多の歲月を費し、畢生の心血を注ぎ、金澤墓誌一篇を鉛槧に附して之を世に公にさる、此舉實に凡桃俗李の輩の

企及し得べきにあらず
夫れ墳墓は一塊の石、一握の土に過ぎざるも、其中に包める
偉人傑士の生命は永遠に泯びず、克く不言の大獅子吼とな
りて後門の徒を策勵すべきなり。予は今此著に接し、讚嘆の
情油然而して起るを禁する能はず。聊か所感を述べて卷首
に贅すと云爾

北國新聞社

大正八年五月

吉倉水央

金澤墓誌序

和田尙軒氏撰金澤墓誌、蓋訪賀國古名人墳墓、以誌其耆者也、
訪古之法、不爲尠矣、而訪墓之舉、未多聞之、訪古之切實、而禮於
其人、可以想焉、西人有發古墳以稱資其學術者、吾邦倣之、亦頻
々聞之、其資于學、則有之矣、然若有嫌於瓦石古人、則不免忍人
之舉、雖經年幾十萬人、則人矣、無對人之禮、而可耶、蓋其禮有之
矣、恐有無之者也、尙軒氏之舉、全異于此、訪其墳墓者、爲傳其人
也、爲明其味也、爲尙其人也、爲令其後世人、興起繼紹、而獎藝勸
業、以福友朋也、得不贊哉、書成而徵序於余、乃書此以爲序、

大正八年五月

節堂舜台撰

確とは覚えぬが一昨年夏頃でもあつたかと思ふ。史談會の和田君によつて、城南野田山に於る諸名家の墓巡りが催されたことがある。何でもその前に、當日展すべき墓所とそれから故人の職業別とが、薰蕕同列的に新聞に載せられてゐたことを記憶する。郷土文化史上に於る先哲先進の事蹟や性行については、殆ど不案内ながら、日頃さうしたこと、多少の趣味癖をもつてゐる自分は、その墓巡りに同行して見たいと思つてゐた。

あの咽せかへる赭土の香を分けて、あのしめくくした蒼い蘿徑を踏で、雨打風淋の幾星霜に、物さびた碑面墓石の塵を拂ひ、幾多故人の芳魂を幽冥境から喚びさましたながら、今にその遺風を追懐するときの、低徊趣味などを考へてみたりした。

然しそれは單にそう思つたまでで、その日の墓巡りには相憎く差岡

へて、同行ができなかつた。墓巡りは其後も引續き二三回も催行されたやうであつたが、どうどう同行の機を得なかつたことを、今に遺憾に思つてゐる。

その前後から史談會では、幾多の事業が計劃され遂行されてきた。舊址の標柱、遺墨の陳展講演會、冊子の刊行と云つたやうにメキメキ進展してきた。そしてその間和田君が、同會の中心となつて活動されたことは云ふまでもなく、同會が郷土史上のために盡した事業の、殆ど大部分は、専ら同君が努力の結晶であると云つても宜い。

この頃同君は「金澤墓誌」を編まれたと云ふ。既往の郷土文化に、さまざまの彩光を放つた故人諸名家の、墓所に併せてその閱歷を略述したものだ。と云ふ。元來史家が、故人の傳記を編む場合、いろくの必須條件もあるであらふが、就中その骨子となるものは、その墳塋の地の精査にあ

る。これ位確實に有力な資料を提示するものはあるまい、故人を傳してその墳塋に及ばぬものは、年譜その他に於てやゝともすると時代錯誤に陥ることが多い。年譜に確實性を欠くものは、傳記として一顧の價値もないのみでなく、延ては所謂世を謬り人を欺くこととなる。世の多くの荒唐と無稽とは、大抵墓をもつてゐない人から生れると云つて宜い。この点に就て和田君が頃來編纂された、金澤墓誌は、郷土人物史上、正に絶妙の資料を提示したものである。此が既往十數年に亙り、ひとりひとりの塋域に就て、親しく踏査した上、精密な考證を経たものであることは、那の數回の墓巡りの催行によつても、知ることが出來やう。その内容のいかに確實性に富でゐるかは、茲に改めて喋々する要はない。和田文次郎君の編纂と云ふことだけでも、全然無條件に信賴のできることを保證すると共に、重ねて編者の努力に多大の敬意と感謝の意を表して置く。

大正八年五月三十日

北陸毎日新聞記者

八田健一

て置く。

偉人豪傑ノ士ハ、能ク一世ヲ風靡シ、四民ヲ教化ス。英名爲ニ人口ニ膾炙シ、功績永ク竹帛ニ垂ル。而カモ其ノ世ヲ謝スルヤ、一碑ノ纔ニ遺體ヲ標スルアルノミ。願レバ悠々タル歲月、雨風アリ世變アリ、人ヲシテ屢々滄桑ノ歎ヲ發セシム。支那ニアリテハ、孟子ノ如キモ、太史遷ノ頃既ニ其ノ生歿埋葬ノ傳ヲ失シ、後人之ガ考證ニ努メシアリト雖モ、猶疑ナキ能ハズ。皇朝ニテモ楠正勝、兒島高德、我金澤ノ前田利久、稻生若水

ノ如キ、其墳墓尙ホ詳ナラズ、豈遺憾ナラズヤ。

余ガ親友尙軒和田君、夙ニ探墓ノ志厚ク、曩ニ數々同志ト金澤市内外寺院及野端山ノ墓地ニ文武英士技藝名工等ノ墓ヲ探リ、其判然セザルモノハ、或ハ之ニ寺僧ニ尋ネ、或ハ之ヲ守墓ニ質シ、或ハ之ヲ舊記ニ檢シ、得ルアレバ榛莽ヲ芟シ香花ヲ供シ、傾覆又ハ破壊セルモノハ、加工修築シテ遺墳ヲ永遠ニ存センコトヲ期セリ。而テ今其梗概ヲ記シ、墳墓案内記ト題シ、印行シテ同志ニ頒タントス。君頃日上京シ、余ガ草屋ヲ訪ヒ、語ルニ其事ヲ以テシ、余ニ一言ヲ求ム、余深ク其篤志ニ感ブ。然レドモ余近年眼疾ニ惱ミ筆ヲ援ル能ハズ、傍人ヲシテ代リテ余ガ言ヲ記サシム。

大正七年五月

戸水信義

加越能河談合は先年數回に亙り市中盤び野田山に墓巡りを相催し其の都度故人の死去年月並に事歴の概要を記したる案内を印刷して同行者に頒ち參考に供し候實は當時實地に就いて調査したるもの甚稀なれば後にて誤脱を發見したるもの多し因りて其の増訂したるものを金澤墓誌と目し單行本として出版致し候

此の書に収むるところの墓は實に四百餘基を數へ彼の墓巡りの當時に較ぶれば殆ど倍蓰し其の増訂に際し新たに實地の調査を試みたるものあれども索求して未だ得ざるもの極めて多數に上り遺憾少からず諸工友禪の如き常に金澤地方に在るべくして未だ發見せられざるが如きは其の一例に候但此の書に娼婦小金を取り顯官搥屋某を捨てたるは聊か思ふところありてなり此類尙多く候在候へばいづれ遠からず拾遺を編むの時期に達すべし諸士幸に指教を尙むなからんことを希冀致し候野田山に散在する墓は悉く其の所在を明示して屢訪に便する豫定なりしも此の書を印刷に附する迄に判明せざること例へば金子清作の如きもの意外に多數に上りたるは遺憾に候唯野田山は地域廣汎にして屢訪至難なれば一葉の略圖を挿み懇ふところの大體を知るに便し候

此の書は墓の所在を誌すを本来の主眼となしたれば従うて各人の事歴を載することの疎略なるは萬止むを得ざること候且其事歴を叙するに或は比較的大いなるものを省き或は反つて瑣細數ふるに足らざるものを擧ぐるなど統一を缺き平衡を失へるもの多きは勿論文辭妥當を失へるなどは等偏へに此書の印刷を急ぐの事情に妨げられたる爲にて事實の誤記も亦た之無きを感せず諸士の斟酌と是正を仰ぐところに候此の書は昨年春夏の交に編纂を了へ直ちに印刷に附せん考にて先聲知人に序文を濡めたり而して當時未だ書目を決めざりし故を以て此の書に冠する序文の中當時の投贈に係るものありて書目を記すこと區區たり不幸にも遽然或事情に阻てられて編纂を果さず往再今日に至れるは當時投贈の先聲に深く謝するところに候

此の書の成れるは一に加越能史談會員諸君等の深厚なる同情に頼れり之に加ふるに調査等に要する多くの費用は悉く加越能史談會の支出を煩はしたり爰に感謝の意を表明致し候

大正八年六月八日

和田 尚 軒

花中
交す

八に
故郷
丁一

勤を
明

諸家墓圖



水麥堀



室宗子



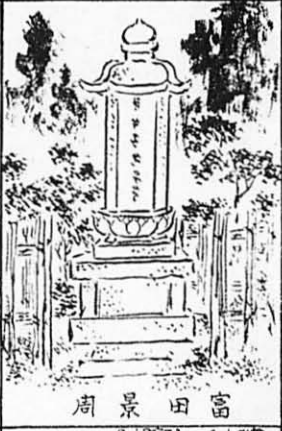
平岡村野



誠水清



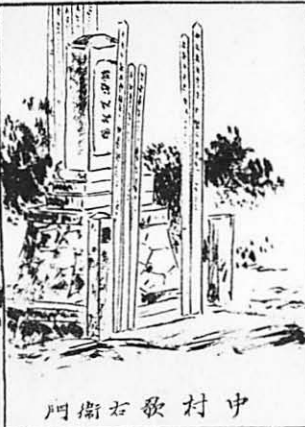
敏克木野大



周景田富



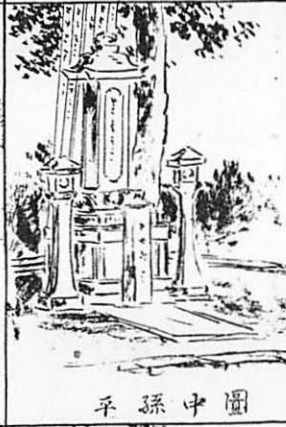
齋芳木青



門衛右歌村中



達宗屋後



平孫中園



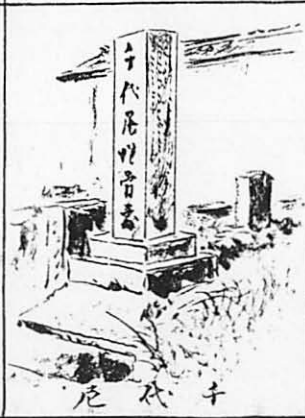
輝日院那陀優



之躬中田



那鳳田津



危代子



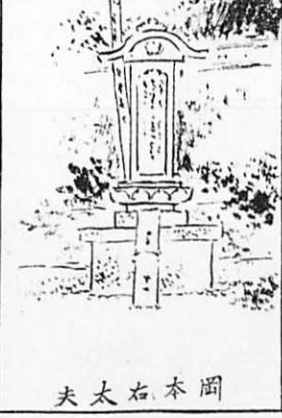
助專管



淑長田吉



養應嶋寺



夫太右本岡

諸家墓誌之管宗輯畫之并贈

如表

此の書は墓の所在を誌すを本来の主眼となしたれば従つて各人の事

金澤墓誌

上編

尙軒 和田文次郎編

市中各寺

祇陀寺

野田寺町二丁目

一 武田秀平

秀山院最寛友月居士

秀平名は信與姫路藩士花井某の子なり文化十一年金澤に來り藩老前田土佐守に仕ふ技巧衆に超ゆ彫刻の銘に友月の號を用ひ陶器には民山と銘す後藩主前田氏の細工物小頭となり木材彫刻の器具を製し又春日山に陶窯を開き製品頗る雅致あり之を民山窯と云

ふ弘化元年九月歿す

二 佐藤蓬齋

蓬齋諱は益明字は子嗣蓬齋は其説なり書を能くす文化中藩老今枝氏の斫筆となる晩に明を失す嘉永七年某月歿す享年六十七

三 直山大夢

釋大夢居士

大夢宗四郎と稱す藩の臺所附足輕なり槐庵大常の門人にして槐庵第六世を繼ぐ後ち閑更、蒼虬の南無庵を其故郷に起し南無庵第三世と稱す明治七年二月歿す享年八十一

四 小嶋文器

文器幼名吉三耶後爲善と改稱す嘗て藩主前田氏の奥勤をなす俳諧を善し初め晩歳といふ後南無庵第四世を繼ぐ明治二十六年四月歿す享年七十七

五 池田 黄平 天克妙通居士

黄平諱は省竹塚と號す筆道を能くし漢學に精し習古塾を開き子弟に教ゆ維新以後道濟館、卯辰山集學所等に教師たり又習古塾を私立小學校に改め自ら經營す明治三十二年七月歿す享年五十七

寶集寺 野田寺町二丁目

一 大野木克敏

克敏仲三郎と稱す藩の人持組大野木克貞の次子なり幼より家臣高木有制に皇學を受け和歌を學ぶ平素勤王の志あり嘗て新嘗祭日に當り以謂らく今宵主上國民の爲に新祭夜を徹し給ふ吾儕臣子の身として安眠すべからずと爾來毎歲其日に當れば必ず獨り端坐

二 後藤 雪岱

筆となる又詩畫を善くす安政六年十二月歿す享年六十四
雪岱次兵衛と稱す初め梅室の門に入り後棉江に從ふ睦月庵と稱し尋て句空庵第四世を襲ぐ明治十九年某月歿す享年六十九

善隆寺 野田寺町三丁目

一 杉坂 安次郎 開外院知見日妙居士

安次郎諱は徹字は義一草蓬と號す藩老本多氏の家臣なり漢籍に精通し從學する者頗る乘し能登石動山の僧多く草蓬に教を受く文久三年七月歿す

妙福寺 野田寺町三丁目

一 岡本 右太夫 覺信院道實日性居士

右太夫は藩の割場附足輕なり明和七年江戸

して寢に就かず元治元年叔父克正に從ふて上京し長藩の爲に周旋し藩に歸り其家に錮せられ十月十九日遂に死を賜ふ享年二十二後正五位を贈らる

二 大野木克正

克正源義と稱す藩の人持組大野木克誠の第三子なり夙に勤王の志あり元治甲子の事に坐し能登嶋に謫せられ明治元年赦に遇ふて歸り金澤縣大鵬となる十三年三月歿す享年五十四

桂岩寺 野田寺町二丁目

一 堀 蘭崖 光明院釋蘭崖居士

蘭崖諱は雅、字は清雅蘭養祐坊眼瘻を以て名を擅にし交亦其業を繼ぐ蘭崖書を能くす文化十四年藩老今枝氏の祐

詰より歸國の際始めて孟宗竹を持ち歸り櫻木十ノ小路の自邸後庭に植ゑ付けたり此より始めて加越能三州に孟宗竹あり文化十四年四月歿す

二 木村 篤道 慈覺院篤道日光居士

篤道は教育家なり夙に各小學校に奉職す明治三十年市立高等女學校始めて成るや高岡町高等小學校長を以て其校長心得を兼ねぬ三十五年一月歿す

長久寺 野田寺町三丁目

一 岡田助右衛門 古徳院之始梅痴居士

助右衛門諱は之式靜山と號す藩の大小將たり夙に心を海防兵制に用ひ安政中藩老奥村内膳に建議し銃制の編成武器彈藥の製造皆

洋法に則るべく又海防を嚴にし軍艦を造べきの要を練陳す後職を罷め書を以て餘生を樂む文久二年十一月歿す

二 大屋愷故

大運院鐵心義賢居士

愷故は曉山又岸舟と號す京都に遊學し旁ら書を岸俗に學ぶ慶應元年藩の壯猶館翻譯方となる又砲臺築造方、鑄砲局承事、金澤縣文學教師等となる夙に普通教育の普及に志し萬國名數記、西洋各國歴譜、英和辭典、金澤名數、皇統小史、加賀能登越中各地誌略其他若干の書を著し皆石川縣小學校の課程書に充つ八年正院其勉勵を賞して金品を賜ふ明治三十四年六月歿す享年六十三

三 河瀬貫一郎

大雄院徹道貫一居士

小松集學所會頭代となり安政中藩校明倫堂助教を以て藩主の侍講を兼ね文久三年六月歿す

三 久田 行藏

觀條院行叟日持居士

行藏後行叟と改む嘉永中新番組御歩を以て藩校明倫堂助教加人となり文久二年助教に進む明治十二年八月歿す享年七十五

四 石 野 湊

本立院誠諦日解居士

湊初源兵衛と稱す御家流の書道に能くし從學する者頗る衆し又謡曲に精しく餘暇に之を教ゆ明治二十三年五月歿す

五 稻垣義方

正院殿坦然日道居士

義方坦然と稱し蜈蚣庵と號す此母の子なり少時武技を習ひ年壯始て文に志す明治初年藩の改作奉行、軍艦棟取役となり後金澤藩

四

貫一郎は藩の執政今氏の家臣なり嘗て羽咋郡長となり官を罷めて身を政治界に投じ改進黨に籍す初北溟社に入りて北陸新報を董宰し又石川縣會議員に選出せられ其議長に推さる大正五年九月歿す

實 成 寺

野田寺町四丁目

一 稻垣 真藏

觀條院宗永日麟居士

真藏靜齋と號す夙に徂徠に學び後新井白蛾に從學し尤も易斷を善くす嘗て算用者小頭、小松馬廻となり文政初年藩校明倫堂助教となる天保元年十二月歿す享年七十五

二 稻垣 此母

厚學院普善日妙居士

此母諱は惟明真藏の子なり嘗て小松馬廻、

權大屬、石川縣大屬等に歷任し二十二年市制實施の時金澤市長に就任し後能美郡長、鳳至郡長たり晩年佛法を究めて三昧に入る又能樂を好み間々之を舞ふ明治四十一年七月歿す享年六十八

六 久田 濟時

久遠院善行日修居士

濟時米三郎と稱し竹軒と號す漢學に精通す明治初年藩校明倫堂助教加人となり尋で文學教師となり又金澤藩の藩掌に任せらる大正五年七月歿す享年八十一

妙 法 寺

野田寺町四丁目

一 宮井安泰

泰善院

安泰通稱柳之助南畝と稱す三池流の算法を學び弘矢絃解術、算法定位、規矩元法別集

を著す又算類凡例を輯纂す世に山崎流測遠法を傳ふ安泰受けて更に石黒藤右衛門に傳ふ文化十二年八月歿す

二 嵐 冠 舍 冠行院清孝日善信士

冠舍は嵐冠十郎の三男にて初嵐橘藏といひ御影座の座本をなす後名を冠舍に改む明治十七年二月歿す

三 小川 清太 清隆院

清太は藩士なり夙に藩主齊泰の信頼を負ふ明治元年北越の戦役に裝輪某等と共に藩兵を率ゐ往きて鯨波の戦に殊功を樹て傷を負ふ後年忠告社に入りて政治を論し時務を談じ既にして河北郡長に任せらる明治四十二年七月歿す

政十三年正月歿す

四 鶴見 小十郎 不遇院屏居日達居士

小十郎名を達といふ字は早牧謙堂九橋又古庵と號す昌平巽に學び歸りて藩校明倫堂の易學主附となる居常勤王の志厚し文久二年藩命を以て京都土御門家に就て易學を修め旁ら二條高松等諸卿に出入し京師の事情諸藩の形勢を偵察す後事に坐し幽閉せらる明治の初宥されて明倫堂教官、金澤藩大屬等となる明治二十九年六月歿す享年七十七

妙 典 寺 野田寺町四丁目

一 水野 光政 貞雄院本源日達信士

光政通稱源六、實は鍛工大河端屋某の子に

高 岸 寺 野田寺町四丁目

一 陵雲院 日尙

日尙字は觀成、凌雲と號す金澤の八世に沙彌訓尙といふ學僧にして當寺に住す安永七年九月歿す享年五十九

二 大川院 日淙

大川院日淙字は潮海入りて當時に住す最も書を善くし又多く書を著す享和二年四月歿す享年六十

三 鶴見 平八 詠櫻齋白瑞日遊居士

平八諱は憲勝藩老奥村氏の臣なり後藩儒となり明倫堂助教たり平八夙に新井白蛾に従學す白蛾易學を其子升平に傳へずして平八に皆傳す子守衛、孫達皆易學を専門とす文

して其師水野多光の養嗣子となり家業の白銀職を能し寶曆十年家を繼ぐ其技精妙時人大に之を賞す加賀後藤の稱あり寛政十二年十二月歿す

二 水野 元房 觀月院鷲峰日清居士

元房通稱源次、實は鞘師野入某の子初め水野光政に就いて白銀職を習ひ後京都に往き後藤光晴の門に居ること數年、歸りて水野氏を繼ぐ鑿痕優美技工超群に依り擢てられて藩の御細工者となる天保三年十月歿す

立 像 寺 野田寺町四丁目

一 優陀那院日輝

日輝字は堯山金澤の本人本姓野口氏九歲剃髮し覺夢といふ未だ一月を経ずして法華八卷

を通過す夙に佛儒二學を兼修す遂に水戸池上兩楨林に歴住し歸りて當寺に住す著書多し安政六年二月寂す享年六十

二 河波 一閑 一閑齋道光日邊居士

一閑齋は有之字は多仲初梅塙後一閑と稱す藩老本多氏に仕が一閑書を讀むに専ら實得を務む終に本多氏の祐筆となり又政和の侍讀を兼ね公暇を以て比隣の子弟に教ふ文久三年九月歿す享年七十三

三 石黒嘉左衛門

嘉左衛門千尋と號す藩の物頭役を勤む初田中躬之に就て國學を修め後江戸に往き平田篤胤の門に入り神典國史を研究し歸りて徒に授く又海外の事情に通ず嘉永中米艦浦賀に來り物情恂然たり乃ち近世諸藩來舶集來船神旨各二卷を著し通商交易は列聖の遺猷

獵該博なり常に比隣の子弟に教ふ嘗て江戸に赴き村田藏六の門に入り蘭學を習ふ遂に實學に依り發明する所少からず渾天儀並に製糸器、捕鯨諸器械の改良より七萬圓竈の創製に及ぶ皆内國勸業博覽會に出品す明治二十三年九月歿す享年六十九

六 津川日濟

日濟初名濟藩の卒族たり夙に諸宗の佛典を研究し殊に益を日輝に請ふ、六十六歳にして得度し京都本山妙顯寺住職となる時に明治九年なり越えて十一年辭して諸州を遍歴し遂に大僧正に累進す臨池の技に長じ和歌俳句等を能くす龍華道人の號を用ゆ明治三十三年二月寂す享年九十

國體の大本なるを説く又常に勤王の大義を説く晩年名を九十九と改む明治五年八月歿す享年六十九

四 石黒 魚淵

魚淵通稱賢三郎晚香又九如と號す田中躬之鈴木重胤等に從遊し國學及歌道を修む嘗て改作奉行兼檢地奉行、産物方等に歴任し明治の初頃民政部省庶務司準大祐等となる後國に歸り養蠶を奨め九谷燒を擴む所著に詞の山比古、旭櫻雜誌あり明治二十三年四月歿す享年七十四

五 河波 有道 泰山院有道日願居士

有道小字豊太郎櫻園と號す一閑の嫡男なり藩老本多氏に仕へ公餘同家の藏書を繕き涉

大圓 寺 野田寺町四丁目

一 土方惣右衛門 有善院

惣右衛門諱は重信武藝に練達し藩校經武館の師範たること十數年門人頗る多し又曾龍音を善くす慶應元年二月歿す享年七十二

松 月 寺 野田寺町四丁目

一 井上 九嶷 正眼院忠山良發居士

盛亮字は文甫、通稱義兵衛、九嶷又整軒と號す藩の會所奉行を勤む嘗て乾莊獄の門に遊び詩を能くし最律體に長す安永四年九月歿す享年二十九

二 土師 清太夫 高忠院義山保百居士

清太夫諱は正直、其祖正庸は元祿中藩の小姓組に班し藩主の祐筆に補し其書風を土師流と稱し子孫其職を世々にす清太夫亦家職を繼ぎ嘉永四年二月歿す

伏 見 寺 野田寺町四丁目

一 芋掘藤五郎

藤五郎の出自時代共に詳ならず口碑に曰く往古加賀國石川郡伏見の里に藤五郎といへる逸民あり蒨蒨を掘りて生業とす一日山中に砂金を得て澤水に洗ふ金洗澤（兼六園の金城靈澤）是なり又金澤の名此より起る其の妻和子とを大乘寺山の麓に合葬し世人之を二子塚と稱ふと明治四十一年三月當寺に改葬す

二 村山 正久

觀實道智禪定門

正久通稱四郎兵衛其先に河内狹山郷鑄物師大明の族なり金澤に來り鑄造業を營む其年代傳はらず元禄十七年七月歿す子孫累世四郎兵衛正久と稱し殊に五世正久は寛政九年金澤城鶴ノ丸の時鐘を製し文政六年又竹澤新殿の時鐘を鑄、九世正久は嘉永六年藩命に依り江戸に適き砲身二

七月歿す

二 下村宗兵衛

覺眞院番靈實道居士

宗兵衛諱は貫考鱗川と號す夙に昌平覺に遊び又古賀精里に従學し舎長に進む會て史記を讀み轉閱凡十九回百家の書見ると雖最も史類に長ず歸りて新番組に補し藩校明倫堂教授となる弘化二年正月歿す享年六十二

三 駒井躋庵

天性院忠崇晴往居士

定勝本姓柴田氏躋庵と稱す加賀藩の足輕なり後京師に往き醫を業とす人と爲り慷慨忠直常に國事日に非なるを憂ふ元治元年長藩の志士と往來結托する事に因り十月永牢に處せられ慶應二年八月終に獄中に歿す享年五十七後正五位を贈らる

十門を鑄造す文久元年鈴見山にて二十九掛砲身一門及其砲架を製す

三 高山 一之

高順院亮觀信士

一之は初久之丞と稱す藩老本多氏に仕ふ夙に大野辨吉と相識る慶應中長崎に適き洋人に就て寫眞術を傳習して歸る藩知事前田慶寧、世子利嗣等命じて撮影せしむ明治二三年の頃上堤町に開業す之を北陸地方寫眞の嚆矢とすといふ明治二十九年三月歿す享年六十餘

淨安寺

野田寺町五丁目

一 馬淵 源之丞

善覺院管番通達居士

源之丞は藩士なり尤も算數に精熟し其師範人たり藩校明倫堂に於て算學を稽古の中に加へたる時源之丞亦出で、教授す天保元年

四 岡野 政釋

靈壽院忠崇政釋居士

政釋判兵衛と號す藩の大小將に班す元治甲子の事に坐し四男四郎と共に家に錮せられ祿を減す明治元年四郎と共に赦に遭ふ十年十一月歿す享年二十三

五 狩谷 芳齋

芳齋院自謙直光居士

芳齋は藩士なり學を好み詩文を能くし大島柴垣、木下晴崖等と經詩の交をなす又齋を岡田楊齋に學ぶ明治十九年二月歿す享年八十餘

極樂寺

野田寺町五丁目

一 伊勢 監物

梅心院覺齋隆閑居士

監物諱は貞意最も有職故實に精通し所著に鞍籠之記あり延寶中藩の大小將に班す寶永四年三月歿す

二 林 壽 三 郎 覺登佐將信士

壽三郎は攝津の人なり嘗て能樂を習ひ今様一流を創め諸國に遊歴し世人の喝采を受く所謂今様能狂言の始祖なり明治二年始めて金澤に來りて興行し藩主前田氏に召され辰巳殿にて演舞し爾後金澤に來ること數たび明治十六年復た來り七月偶病に罹りて歿す

三 久 保 三 柳 東林院殿絨毬惠風三柳居士

三柳は絨術及び産科を能くし藩主前田氏の侍醫たり其絨術は俗に一本絨と稱へ頗る其妙を得三柳幾多の盲生を其家に養ひ絨術を教へて生計を營ましむ當時北國の絨醫概れ三柳の門に出づ明治二十九年三月歿す享年八十六

四 原 吳 山 曾竹庵入譽吳山眞翁居士

吳山は金澤の人藏宿を業とし紺屋伊左衛門と稱し維新の後原氏を冒し名を與三兵衛と

二 遠 藤 數 馬 格中院殿高庵不偏居士

數馬諱は高環加賀藩に仕ふ常に西洋學を究め自ら日時計及び測量機等を創作す又金澤分間繪圖を製し三州圖籍を監修し嘉永二年領民外國漂流中の見聞を録して時規物語を作る文化以後西洋學の藩内に行はるゝは皆其功なりといふ明治三年九月歿す享年八十

二

三 榊 原 拙 處 滿千堂逸翁拙處居士

守典字は子常通稱三郎拙處と號す又逸翁、一翁等別號多し藩士なり頻に書畫を作り詩文に耽る毎日朝餐前を以て孝經の揮毫を日課に充て其全文を唐紙一葉に書し終に一千四百本に至る明治八年六月歿す享年八十五

改む風流洒脱頗る點茶を好む又樂燒を製し明治十三年陶器窯を卯辰鶯谷に造り木米の風に倣ふて陶磁を製す三十年九月歿す享年七十一

五 桂 仙 太 郎 桂嶽即仙居士

仙太郎本姓吉田氏五兵衛と稱す金澤隨一の落語家なり譜踏百出而も顔容の滑稽なる一たび上場すれば觀客視て解頤せざるなし明治三十一年四月歿す

妙 慶 寺 蛤坂町

一 松 平 伯 耆 長壽院殿松譽淨貞居士

伯耆諱は康定初久兵衛と稱す嘗て佐々成政に仕ふ藩主前田利長其武功を聞き人を遣はし諭して來り仕へしむ淺井暁の戰に殊功あり利常の時金澤城代となり又大阪の兩役に武者奉行となる元和六年四月歿す

四 梅 原 可 也 榮學院殿繪譽賢雄居士

可也諱は政允初め石之介と稱す藩士なり豊嶋洞齋に従學し又江戸に往き川田壺江に漢籍を、福澤諭吉に洋學を習ふ明治十四年金澤區長に任せられ後石川縣收稅長に轉ず明治十九年九月歿す

成 學 寺 蛤坂町

一 木 下 仁 平 開見院法善諦舍居士

仁平諱は衛字は君均初卒次郎と稱す晴崖と號す家を繼で儒となる嘗て昌平校に學ぶこと數年文政中藩校明倫堂助教となる嘉永五年三月歿す

二 木 下 平 之 介 聰明院政教眞導居士

平之助諱は勉、敬堂と號す藩儒大島桃年の次子なり晴崖

歿し其養嗣子となり家業を承く藩校明倫堂に子弟を教
ゆ明治元年六月歿す

寶・勝 寺 蛤坂町

一 千岳 宗仍

宗仍は道學文章並に開け藩主利常嘗て梯天
神社を建つ千岳代りて上梁文及銘を作る初
寶勝寺及少林寺に住し後傳燈寺に轉す寛文
三年九月歿す

二 岡田 重之 兩明軒積岩雪翠居士

重之字は善長通稱喜六耶雪翠又洞華と號す天和中先簡頭
等たり蛤坂に精く技控に工なり旁ら詩賦を嗜む延寶二年
加賀藩に仕ふ享保十四年六月歿す享年八十

本長 寺 蛤坂町

一 河合十良左衛門 天龍院順譽徳務祐之居士

罪を獲十月獄中に腰斬せらるる享年三十四後
正五位を贈らる

三 松原 一記 貞純院一記日貫居士

一記諱は孟敦初名喜多川五郎右衛門算數測量に長じ諸生
に教え官廳に勤む嘗て算法礎を著はす明治二十八年十二
月歿す

國泰 寺 泉寺町

一 高峰 精一 承德院惟道精一居士

精一は初名元稜大阪に往き緒方洪庵に従學
し歸りて壯猶館に於て蘭書を翻譯し醫學を
究め又藩設卯辰山養成所に醫員となり又舍
密局に諸生を教授し尋で金澤醫學館に出で
理化學を教授す後年富山病院長となる明治
二十三年八月歿す

十良右衛門諱は祐之、家傳の抜刀術を受け其技を究めて
家聲を墜さず藩主前田氏に仕へ先手物頭、持筒頭となる
文久元年八月歿す享年四十九

承證 寺 泉寺町

一 勝木 氏重 淨水居士

氏重通稱權太夫其父氏家後藤顯乘に就き象
嵌の技を學び來りて藩主利長に仕ふ氏重其
業を繼ぎ萬治元年九月歿す子孫其業を繼ぐ

二 福岡 惣助 轉住院雪嶽即心 日途居士

惣助諱は義比加賀藩の與力たり舊弊を改革
す文久三年蜚語あり浪士大に飛驒に集まる
と惣助藩命に依り往いて視察し又潛在京師
に入り形勢を得て歸る因て隨を被り閉門を
命せらる元治元年長州人吉山某の事に坐し

常松 寺 泉寺町

一 平岩 晋 種徳院雪峰鏡湖居士

晋雪湖と號す最も書を能くし縣立各學校に教鞭を執る嘗
て金城勝覽圖誌二卷を著はし中濱松香之に蘭畫を加ふ明
治三十五年十月歿す

二 阿部 碧海 碧海院殿大嶺全徹居士

碧海は加賀藩士なり廢藩の後意を實業に傾
け明治二年自宅に大小着畫の陶窯五基を築
き工人八十餘名を役し内海吉造を工長とし
て盛に製造し十二年に至り廢業す然れども
今猶市中に陶窯あり陶工亦多くは碧海の先
導に賴り従業者の半は其工場より出づとい
ふ明治四十三年六月歿す

三光寺 泉寺町

一 篠田 貞治 淨心院住岳念生信士

貞治諱は爲則、工師篠田安弘の養嗣子なり山元某に擊劔を習ひ長井葵園を師として臨池の技に長ず嘉永三年十月歿す

二 石野伊左衛門 善譽悅道之元花石居士

伊左衛門年甫めて十歳作事所の石工となり姓を石野と賜ふ十一歳狂言主附を命ぜられ殿中に於て厭々藩侯の對手を勤め明治元年狂言棟取役を命ぜらる明治十六年三月歿す享年六十九

金剛寺 泉寺町

一 沼田 悟郎 呼友軒吾心正覺居士

悟郎は藩老津田玄蕃の家臣なり夙に英學を修め身を教育界に委ね能く其職に稱ふ嘗て

石川縣中學師範學校、石川縣專門學校、石

遊ふ覺めて後其歴々目に在るものな手づから圖に作る以て屏風となす後征韓の役起る元珍亦從軍し屏風の圖を削ぎ持して之に赴き實際に驗して多く利を獲たりと寛永十一年九月歿す

二 青地 等定

等定幼字は内匠初名は定好又定延、通稱四郎左衛門馬廻頭等たり寛永の末藩主光高夢中に俳句を得句意極めて吉なり時に綱紀將に生れんとす光高乃ち臣僚を召して聯歌の會をなし其句をつかしむ等定亦與る寛文五年八月歿す

本覺寺 六斗林二丁目

一 常樂院日經

日經は或は加賀の人といふ永祿三年生る名は善海、號は常樂院、奥羽上總尾張等に布教して法華宗を弘通し妙滿寺の貫主となり謗法者を折伏して纔に法華宗を維持し江戸に

川縣工業學校、三重縣師範學校、山口縣中學校等に各校長たり大正元年九月歿す

二 桂 正直 義忠院正道直心居士

正直初名圭三郎藩校明倫堂訓導たり又蘭書を讀む其外交に長け時務を知るを以て藩命に依り往て昌平齋に入り朝野の事情を偵察して藩に報ず文久中歸りて勤王の大義を唱ふ元治甲子の變罪を獲て獄に下り大赦に逢て宥さる晩年加賀藩勤王始末、石川縣政治史を著す大正元年十二月歿す享年七十四

西方寺 泉寺町

一 青地 元珍

元珍名は内匠助後四郎左衛門と更む慶長四年前田氏に仕ふ大阪の亂從軍して戦功あり相傳ふ元珍壯時夢に朝鮮に

行きて徳川家康の怒に觸れ師弟共に牢獄に繋かれ遂に京都に送られ六條磔にて劊刑の刑に逢ふ後ち丹波に幽棲し又加賀に來り三輪志摩に庇保せられて七寺を建立す大小の法難に屈せずして護法に努め日蓮の再生と稱せらる

二 三輪 志摩 寶積院殿法受日好大居士

志摩諱は長好、初め作藏又主水と稱す前田氏に仕ふ其母は實に利長の乳母なり軍功多し厚く日蓮宗を信じ其佩ふる所の刀及に經文及び宗祖日蓮の草名を鐫す寛永七年八月歿す

三 恒川 穩樂齋 貞忠院殿觀心日法居士

穩樂齋諱は登壽、荒子七士の一人恒川監物八世の孫なり藩の重職に歷就す神佛を敬信し又和歌を能くす嘗て諸家

の隨筆類を抜きて穩樂齋隨意集、遠田日記等を著す文久二年八月歿す享年六十八

四 戸 水 汪 萬頃院日汪法師

汪萬頃と號し又杜萬頃と稱す金澤の人嘗て東京に適き法律學を修め久徵館に在りて同窓會雜誌を刊行す今の加越能時報是なり中年臺灣に往き臺灣商報を發刊し親ら筆を把る後野口日主を師僧とし國家的日蓮主義を鼓吹し萬頃叢書、萬頃血書數卷を著し又滿洲雜記、遊如上人等の著あり晚年郷に還り石川舜台に親炙す大正七年四月歿す享年五十八

龍淵寺 六斗林二丁目

一 獨角 宗麟

宗麟は加賀の人師承なくして頗る書を善く

忠順字は知還、通稱五郎左衛門安永中定火消役たり室鳩巢に従學し傍ら聯歌を好み葛巻昌興と友善なり昌興の能登に隨せらるゝや時昔親交の者之を願みず忠順獨り之を送る後に厚きこと率れ此類なり天明五年十月歿す

月照寺 六斗林二丁目

一 遠藤 秀景 崇禎院發雲秀景居士

秀景は藩士不破氏の家臣なり夙に漢學を修め慷慨にして氣を尙ふ西南の役同志島田一良等兵を擧げ西郷隆盛に聲援せんと欲す秀景其の兵食足らざるの故を以て不可なりとす亂平ぐ一良等大久保内相を暗殺す秀景實力を以て政權を得るの要を知り盈進社を起し不平齣物の徒を籠蓋し舊藩主前田家に要請して士族授産金を得起業社を起し北海道

す天保初年鶴來在の一閑院に住し自ら書して一字一石の法華塔を建つ弘化四年龍淵寺に轉す安政四年五月寂す享年五十七

二 近藤 理清 松嶽齋天山理清居士

理清通稱新左衛門江戸參觀の時毎に古流生花家元關本理恩に就きて學び花道の蘊奥を究む遂に第五世家元を繼ぐ明治十九年二月歿す

希翁院 六斗林二丁目

一 神戸 藏人 一宙院殿泰安齋居士

藏人の家業と平重盛に出づといふ幼時母と偕に前田秀繼に鞠習せらる後藩主前田氏に仕ふ大阪の役軍に在り誤りて老臣横山長次の家臣業と職ひ殺さる事は元和元年五月に在り

二 竹田 忠順 長篤院殿樹山道忠居士

に開拓事業を、千島に漁業を始む皆失敗に歸して廢む明治二十二年石川縣會議員となりて議長に擧げられ明年金澤市より選出され衆議院議員となる四十四年五月歿す享年六十餘

玉龍寺 六斗林三丁目

一 森田 悟由

悟由は大休と號す江戸吉祥寺の學寮に掛錫し旁ら東條一堂に就て内外の典籍を研鑽す後奕堂に就て大事因縁を得慶應の末以來龍德寺、玉龍寺、天徳院に轉住し明治二十四年越本山永平寺に昇住し曹洞宗管長となる大正四年二月寂す享年八十二

本是寺 六斗林三丁目

一 富田屋 掉江 遊仙庵掉江日善信士

通稱長兵衛杉亭と號し所居を遊仙庵といふ俳人眉山の門人なり一時閑來と共に趙墨壺を預かる弘化四年二月歿す

少林寺 三問道

一千岳 宗仍 (寶勝寺の項參君)

二 宮崎 寒雉 總齋寒雉庵主

義一通稱彦九郎後雜髮して一艸庵寒雉と號す累世能登中居に家し鑄冶を業とす寒雉の父金澤に來る寒雉幼より京都に赴き名越昌高の門に入り鑄子の製法を學び金澤に歸り家を繼ぎ藩主前田氏の御用釜師となり諸種の雅器を鑄造す之を初代寒雉とす宮崎氏累代の墓は本寺に在り唯初代寒雉の墓と稱する者は木ノ新

玉泉寺 三問道

一 清水 誠 實相院天壽誠道居士

誠は通稱金の助藩士なり明治三年佛國に留學し工藝大學に入る七年佛國大學院金星經過測検査に聘用せらる偶々吉井友實と巴里に相見る友實我邦鑄寸の供給を外國に仰ぐの愚を笑ふ誠心大に動く八年歸朝し新燈社を東京に起し清國に輸出し又瑞典に赴き安全鑄寸の製法を究め十三年始めて鑄寸の輸入を杜絶し各種の鑄寸製造機械を發明す明治三十二年二月歿す大正四年其功に依り從五位を贈らる

龍雲寺 笹下町

一 土屋 義休 空宅直心居士

保持明院に在り然るに宮崎家の所傳には持明院の二代寒雉の墓とす今姑く此に従ふ

三 宮崎 尚義 偃庵自微信士

尚義通稱彦九郎其技祖父寒雉に譲らす享保十年白髭神社に奉納する者の爲に青銅製の扁額を作るに和田淡水に請ひ白髭社の三字を揮毫せしめ鑄型に苦心して遂に成る筆勢生動人其絶技を賞す是より名都下に喧しといふ寶曆十三年某月歿す

四 竺 無貫 無貫一無

無貫は本姓安田氏、鷲津毅堂に儒學を習ひ吉田文淵に就て詩を學ぶ安政三年來りて少林寺を再興し又勸願所傳燈寺を興復し遂に同寺に住す管長關實齋其功勞を表彰す明治四十年二月寂す享年七十八

義休は土屋大學助五世の孫なり石川郡御供田村の人、父の十村役を襲ぎ元祿七年剃髮して直心と號す又自ら野衲と稱す最も農事に長し耕稼春秋を著す又數理測量に精しく遂に加越能水路大經を著す是より先元祿中金城隆盛私記を著し金澤城の築造等を記述す享保四年正月歿す

常榮寺 笹下町

一 松井 乘運 乘運院泰山日松信士

乘運北蘭堂と稱す年少京師に往き佛師祐介に従うて修業し御免大佛師となりて郷に還る彫刻の妙技一に之を至誠の感應に待つ故に逸事多し繪畫和歌舞謡等の餘業を能くし又花道に長し庸軒流家元となる明治二十年

七月歿す享年七十三

本光寺 桃島

一 圓中孫平

寶山院正覺日淨居士

孫平は越中の入金澤中野屋の後を繼ぐ夙に外國貿易に志し益龜組を大阪に起して外國貿易を擴め加賀網を北海道に弘め又た九谷燒の改良を計る等施設する所多し九年米國に渡航し歐米人の嗜好を研究す爾來歐米の大小博覽會に加賀國産品を出品して聲價を博し横濱に扶桑商店を起し製糸製茶の輸出に努力す十七年佛國に渡航し歸りて直輪業に従ひ既にして退隱せり孫平本邦の海外貿易に與かりて大に功績あり明治四十三年七月歿す

安立寺 沼田町

一 不破富太郎

忠徳院義勇日達居士

富太郎諱は友風、藩主前田氏の世子慶寧に屬す武事に長じ槍法を能くす夙に勤王の志を抱き藩内の志士と交はる元治元年慶寧に扈して西上し各藩勤王の志士と往來す七月十九日の變罪に坐し十月切腹を命せらる後正五位を贈らる

二 山田定右衛門

仁忠院賢武日達居士

定右衛門諱は賢武明治元年北越の戰役監軍となりて軍に従ふ越後長岡の激戰に死す事は明治元年七月に在り

大蓮寺 野町一丁目

一 堂後屋三郎右衛門

三郎右衛門は能登宇出津天香城主三宅小三郎の次男なり

天正の末裔となり金澤に來り餅を驚き藩主前田氏の用命を聞く慶長十三年藩主利長之が爲に町役を免す三郎右衛門刺髮して覺忍と稱し元和七年四月歿す元祿の頃既に茶商に轉じ片町に在り

二 大庭探元

儀徳院超譽探元居士

探元諱は久浮字は徳基京都の人其父探柳醫を以て加賀藩に仕ふ父歿し松溪家祿を襲ぐ濟生の餘暇詩を好み書を能くす寶曆四年正月歿す

三 大庭順元

秋鏡院圓譽順元居士

順元諱は忠孝、松溪の子なり詩才あり夙に家業を承ぐ安永二年八月歿す

四 藤田維正

通達院法性維正居士

維正字は公甫通稱六左衛門容齋と號す又喚翁、蘿月窟主人の別號あり大阪の藤澤東暎に従學し歸りて明倫堂に助教加人たり又維新の後縣立各學校に歴職す晩年和學を兼修

三三

し高橋富兄と共に日本文法問答を著して徒に授く石川縣にて日本文法を講ずる此より始まる其他著書多し明治二十四年八月歿す

因徳寺 野町三丁目

一 瀨波屋鷄馬

鷄馬名は宇市後犀輔と改む嘉永中町會所の役人となる頗る狂歌を能す野町神明宮の西南に家するを以て西南宮に作る華山人、託花園、暖雪樓等の別號あり江戸の蜀山人、宿屋飯盛、大阪の鶴適屋等と親交あり門人頗る多し歿年等今詳ならず本寺に在る瀨波屋の墓に合せ葬るといふ

光專寺 野町五丁目

一 箔屋伊助

三三

伊助もと押箱を業とす文化五年藩主前田氏殿閣を造營するに當り所用の箱を命す依つて京都より箱打職工數名を招備し製箱に従事す蓋し伊助を以て箱商の始祖とす文政十年八月歿す

二 越前屋 大常 釋敬念

通稱次郎右衛門櫻井梅室の門下なり初め龍居と號す梅室の後を承け槐庵五世を繼席し天保十三年六月歿す

三 朝見 大素 釋立善

通稱次六、大常の孫なり俳諧を善くし菅谷眞澄の後を承け槐庵九世を繼席す明治二十七年五月歿す

四 石田 古周 一念院釋周編

古周夙に瀬川宗直に數學を習ひ尋で小竹五郎左衛門に師事し其歿するや後を繼いで遺弟に教ゆ後關口開に従學し數學の濫奥を究

に藥店中屋、龜田兩家に命じて調合販賣せしむ養叔能く詩を作る元禄十七年十月歿す關絶ゆ依て年忌には兩家にて法會を修む

二 上田 作之丞 幻齋道夢居士

作之丞諱は貞幹字は叔稼龍郊龍野又幻齋と號す専ら當世の時務を講じ藩士從學する者衆し天保嘉永の交執政長連弘等其説を奉する者庶政を改革す皆黒色の羽織を着す人之を黒羽織黨といひ作之丞其黨首たり著書多し元治元年四月歿す享年七十餘

三 伊藤 雪鴻 雪鴻院正嶽秀道居士

雪鴻通稱正秀俳人なり明治七八年の頃生駒萬子の此君庵を繼席し三十八年十一月歿す

櫻井梅室 櫻井梅室 百姓町

櫻井梅室

め衍象舎の一員たり區學校、師範學校、北陸英和學校等に教鞭を執る明治三十一年五月歿す

五 松本 證專 釋證專

通稱千彦俳諧を善くし庄田晴江の後を承け早苗庵第二世と稱す明治三十三年六月歿す

瑞泉寺 五十人町

一 和泉屋 李下

通稱三右衛門、上田馬來の門下なり馬來の後を承け柿丸舎を繼席し又成田蒼虬の後を承け槐庵三世と稱す享年三十九

瑞光寺 上本多町一番丁

一 堀部 養叔 壽康院益方養叔居士

養叔は醫師なり初三竹と稱す家に徳川家傳方の萬病圓並烏犀圓の調合を知る依て其處方を藩主綱紀に献す綱紀更

梅室名は能充、家磨刀を業とす後専ら俳道に遊び初馬來、關更に従ひ李下の後を承く諸州を遊歴し足跡國中に遍ねし二條公嘗て書を賜ふ曰く俳諧の達者中興の器なり宜く花下宗匠たるべしと當時蒼虬鳳朗卓池を合せて天保の四老人と稱す嘉永五年七月京都に歿す享年八十二因りて本善寺及本寺に分葬す

法然寺 松本町

小金

寶水、正徳の頃娼婦小金あり醜名頗る高し情夫と共に白裝束にて水杯を酌突はし犀川の法島河原にて情死す依りて墓を建て比翼塚と唱ふといふ後本寺其墓の在る處に移る

寶圓寺 下百々女木町

一 大透圭徐

大透圭徐は越前高瀬寶圓寺七世の住僧なり
天正の初前田利家越前府中に在り大透に従
ひ禪を修す天正十一年利家金澤に鎮を徙す
に當り寶圓寺を建て大透を開祖とす文祿三
年大透能登七尾の長齡寺に隱居す慶長三年
九月寂す

二 量山繁應

量山繁應は慶長十年本寺第四世の住僧とな
り能登本山總持寺後見職を勤め金澤に宗龍
寺並に久昌寺等を興し其開祖となる元和八
年三月寂す

三 俵屋宗達 泰嶺院宗貞劉達居士

六棟を購ひ窮民二百餘人を收養し之と衣食
を共にし獨立經營し遂に藍綬褒章を賜はる
財團法人小野慈善院新に成るに及び推され
て其院長となる明治四十五年四月寂す享年
六十七

瑞雲寺 下百々女木町

一 長井平吉 仙翁文氣居士

平吉字は寛卿陶齋又葵園と號す藩校明倫堂
助教となる嘗て藩主の命を受け津田鳳卿等
と大日本史の後を承け皇朝百代通略を纂修
す平吉又書を能くす安政七年二月寂す

獻珠寺 下百々女木町

一 金谷善應 善應道繼和尚

善應諱は文義幼時往て廣瀬淡窓に従學す歸

宗達は加賀の人或は能登の人といふ金澤に
住居し本寺第五世泰山と親厚なり最も繪事
に長じ狩野土佐兩派を融和して自己獨特の
手法を出し光琳風の先驅を成す晩年京師に
出で本阿彌光悅と親善なり既にして金澤に
歸り寛永二十年八月寂す近年有志者爲に宗
達會を起し遺墳の修補保存に従事す

四 前田利實 廣嶺院殿智源了道居士

利實通稱喜六郎梅郭と號す藩主吉徳の四男
なり弱冠書を讀み旁ら詩を好む其詩概ね巧
致なり明和三年五月寂す

五 小野太三郎 淨光院慈觀照善居士

太三郎人となり温良恭謙慈愛の心厚し廢藩
の際盲者二十餘人を己の家に收養し後家屋
りて本寺に住し漢籍と作詩を兒童に授く詩
作其最も好む所なり又善く時事を論ず晩年
建仁寺の輪番に當り紫衣を勅許せらる然れ
ども辭して赴かず明治二十六年四月寂す享
年六十四

如來寺 上鶴間町

一 久徳傳兵衛 東道院彼喚崎則居士

傳兵衛名は尙則藩の大小將たり夙に勤王の
志あり元治甲子の變事に坐し能登嶋に謫せ
られ明治元年赦に遭て歸り十一年五月寂す

二 渡邊姜文 釋誓溪居士

姜文は俳號なり通稱太餘文園亭又何論亭の
別號あり嘗て外國貿易等數多の事業を計畫
し米國に渡航すること再度後俳道に遊び足

跡殆ど全國に洽く所著に俳諧新題林、俳諧正式鑑、俳諧手ほどき、梅か香集等あり又善く滑稽文を作り狂歌都々逸亦妙なり戯號を南猫房戀阿彌といふ大正三年五月歿す享年七十四

三 渡邊 招爲 釋招爲居士

招爲通稱太郎平別號を椿庵といふ斐文の弟なり父松窩常に家に俳席を設く故に自ら俳諧に通じ柏葉を師とし雪岱甫立等を友とす性酷だ酒を好み談論風發佳句其間に成る大正四年五月歿す享年六十七

天 德 院 上總岡町

一 前田 光 高 陽廣院殿將殿天眞大居士

光高幼名利高又犬千代藩主利常の子なり寛永十六年家督を繼ぐ之を藩主第四世とす正

る元治元年八月歿す享年十九

五 奕堂 梅 崖

奕堂は三界無頼又は無似子と號す山城國大宅寺は醍醐天皇の創むる所にて中廢す奕堂住して寺産を作り舊に復す安政四年天徳院に住す法席最も昌なり明治の初永平總持兩本山大に宗權を爭ふ奕堂總持寺を代理し遂に伸理を得且總持輪位を廢し獨住とし當薦して總持寺住職となる勅して弘濟慈德禪師の號を賜ふ後曹洞宗管長となること再度明治十二年八月寂す

六 淺井源右衛門 特敬一政居士 小篠 甚四郎 機翁道頓居士

源右衛門、甚四郎は共に正保二年四月藩主前田光高に殉死す

四位下左近衛權少將たり光高學を好み藩内文教の基を開く正保二年四月薨す享年卅一

二 前田 重 靖 天珠院殿晴月高賢大居士

重靖幼名利見又嘉三郎藩主吉徳の子なり重熙子なし依て養嗣子とす寶曆三年五月家督を繼ぐ之を藩主第九世とす正四位下左近衛權少將たり同年九月薨す享年十九

三 前田 偕 子 景徳院

偕子は徳川家齊の第二十一女文政十年十一月來りて藩主齊泰の夫人となる明治元年五月歿す享年五十六

四 前田 通 子 照光院

通子は應司政通の養女實は久我建通の第二女安政五年四月來りて藩主慶寧の夫人とな

七 赤羽 萬 次 郎 万松院叢山真忠居士

萬次郎瘦鶴と號す信濃の人東京の嚶鳴社に在りて沼間守一等に従ひ政治を談論す後金澤に來り北陸新報主筆となり尋で北國新聞社を起し筆政を主る地方新聞の改善蓋し其力に頼る明治三十一年九月歿す

八 田 中 信 吾 信光院殿吾山貫道居士

信吾球外と號す加賀小松に生る大阪に之き緒方洪庵に従學し福澤諭吉と親善なり慶應中金澤藩醫學教師、卯辰山養生所棟取となり後金澤醫學校長兼金澤病院長等となり次で私立尾山病院を起す明治三十三年一月歿す

經王寺 下鶴岡町

一 山本源右衛門 本解院源明日道居士

源右衛門名は基庸字は子遠所居を龜井庵と號す室鳩巢に従學し詩文を屬し和歌を善くす最も臨池の技に長じ書訣を持明院基時に受く基時奏請し其家深秘する所を授く世に和樣書家中の巨擘と稱す享保十年七月歿す享年六十九

二 鏑木 貞 眞如院妙本日融大姉

貞は江戸神明の神職鏑木政幸の女なり藩主吉徳の側室となり公子世佐を産む吉徳後男子五人あり貞其所生を立てんと欲し落し大槻傳藏に私通し事露はれ母子共に密室に幽せられ寛延二年二月憤死す享年四十三

三 本保十太夫 離園研義館日解居士

七

五 千秋順之助 開能院親知日了居士

順之助名は藤島願堂と號す又有磯、黃薇庵の別號あり加賀藩士なり嘗て江戸昌平營に學び舍長となる歸りて組外に進み藩校明倫堂助教を以て世子慶寧の侍讀を兼ね平生尊王之志厚し元治元年の變罪に坐し十月死を賜ふ享年五十後正五位を贈らる

六 岡田 喜陸 清瀨洞楊齋日香居士

喜陸名は成憲楊齋と號す藩の南土藏奉行兼書物奉行となり又藩校明倫堂助教加人たり常に丹青の技を習ひ殊に能く墨梅を畫き人其絶妙を稱す元治元年四月朔日歿す享年八十

十太夫名は以守夙に西村氏に天文學歴學數學を受け有澤氏に甲州流軍學を習ひ又山崎流測遠術の蘊奥を究め禮法、築造術にも精通し藩命を以て國曆を選び又造作辨、燈前雜話を著す嘗て作事奉行等を勤め寛政四年藩校明倫堂の成るや天文學を諸生に教授す越えて六年二月歿す享年七十

四 大橋作之進 松樹院殿日幹日勤居士

作之進諱は成之嘗て高岡町奉行に任じ後馬廻頭たり夙に西村篤行に従ひ天文學を講じ又火術舍密學に通じ三社の私邸に試験所を設く嘉永の末西洋流火術方棟取となり尋で壯猶館の組織に參畫し入りて洋法砲術を藩士に教授す安政六年十二月歿す享年六十

仰西寺 三所町

一 澤田宗次 正信居士

宗次初名次作宗澤と號す少時梅田某に就て蒔繪の業を習ひ後自ら一派を創し掌大の器中に複雑なる山水人物等を描き遠近高低寫し得て澁滯せず其技精妙近世の名手と稱す大正四年六月歿す享年八十六

棟岳寺 上徳匠町

一 吉田長淑 天球院月心宗江居士

長淑は江戸の人桂川甫周に和蘭醫學を習ひ蘭法外科漸く行はるゝに當り物議を排し率先して蘭法内科の業を創む實に本邦に於る蘭法内科醫の鼻祖なり連に和蘭醫書を翻譯し加賀藩主前田氏爲に其資を助く後前田氏

の抱醫師となり文政七年老侯の病むや召されて金澤に來り八月病歿す享年四十六

二 永原 孝知 仁了院殿徳孝行譜居士

孝知通稱甚七郎藩の馬廻頭兼聞番たり元治元年將軍徳川氏自ら水戸浪士武田耕雲齋等を撃つや孝知適京師に在り藩兵を督し之を援く浪士降書を藩營に呈す孝知之を受け其徒八百人を敦賀に監護し朝夕慰撫意を盡して便安を致す耕雲齋等深く之を徳とす嘗て軍政寮副參事、金澤藩參事となる明治六年一月歿す

四 永原 好知 法性院眞覺好知居士

好知通稱恒太郎藩の馬廻組たり嘉永以降藩に在りて國事に盡す元治元年世子慶寧京都に上る好知病を力めて奔走す同年四月歿す

松山寺 八坂

一 笠間 清兵衛 政孝院殿忠世日情居士

清兵衛諱は政孝藩士なり嘗て祇役して江戸に在るの日柳生俊平、柳生俊峯に従ひ新陰流を修む武術練達を以て著る嘗て改作奉行兼勝手方となる明和五年九月歿す享年六十七

二 山腰 天鏡

天鏡は越前の人夙に奕堂に侍し又森田悟由に侍し尋で専門本校に學び學識精博又徳聲あり曹洞宗議會議長、曹洞宗大學林々長兼教頭、永平寺法眼藏講師等となり入りて本寺に住す大正三年六月寂す享年六十四

永福寺 八坂

享年三十二

眞行寺 二十人町二番丁

一 八島 半藏 自運院英山宗雄居士
半藏諱は爲次加賀藩に仕へて能美郡に代官たり劍術を能くし子弟に教ゆ寶曆十三年四月歿す享年七十六

二 八島 金藏 賢龍院秀山長英居士

金藏諱は爲矩藩の新番小頭、組外等たり文政八年致仕して一刀と號す最も劍術に精しく一刀流の名頗る高し門弟衆し文政九年八月歿す

三 八島 龍助 安龍院峯山爲久居士

龍助諱は爲久藩の馬廻組等に班す夙に家業を繼ぎ劍術を能くし子弟に教ゆ慶應二年十一月歿す

一 古市 左近 北周院殿雪蔭利憲居士

左近諱は胤重藩主前田利常の殊遇に感し利常歿する時自刃して以て殉す時に萬治元年十月なり

雲龍寺 八坂

一 河内山半左衛門 永將院殿武山道隆居士
半左衛門諱は寛明初橘三郎と稱す少より武技を好み弓馬刀槍皆其奥秘を究む新番小頭となり組外に進む嘉永四年十一月歿す

二 成瀬 内藏助 晴雲院殿快輝迂湖居士

内藏助は迂齋と號す家世藩の人持組たり書を能くし詩を作る皆名あり慶應元年六月歿す

常福寺 小將町三番丁

一 梅田 年風 三晴庵釋道譽

年風は梅田氏名は季信、通稱九榮剃髮して菅阿彌と稱す最も善く佛齒を描く又正風の俳諧に長し北枝の文藝を繼

ぎ趙翠蓬といふ弘化三年九月歿す

二 梅田 江波

江波は年風の男通稱九榮齋を以て前田氏に祿仕し齋號を幸直といふ又俳諧を能くし翠蓬並に北枝堂の俳號を用ひ萬延元年五月歿す

靜明寺 並木町

一 小谷 繼成

名宗院殿用支日休居士
繼成通稱伊兵衛廉泉と號す中歲始めて室鳩巢に從學し遂に室門七弟の一に數へらる文を能くし詩を作る享保中國字を以て勉善紀聞を著す享保五年八月歿す

養智院 裏古寺町

一 宮城 凡兆

凡兆は蕉翁門葉中に名高し姓は宮城氏金澤鍛工藤江氏素と藤島友重に出づといふ慶長中五代清光始めて加賀笠舞に住し六代清光最も著名なり藩主綱紀非人小屋を笠舞に起すに當り特に其園内に鍛鍊場を興ふ此より非人清光といふ五代以下累代皆此に葬る

法船寺 寶船路町

一 雲 蝶

幾曉庵幽齋支心比丘
雲蝶は當寺十四世僧明齋の弟子なり初俳諧を剛更に學び後ち希因の門に入り所居を幾曉庵と號す寶曆六年四月歿す

二 中山 眉山

觀巖眉山庵主
眉山は大阪屋七右衛門といふ俳道に志し翠蓬二世を稱す文化十年四月歿す

三 廣瀨 政敏

入源院本齋休心居士
政敏通稱勘右衛門藩の大小將に班す平素勤

の人初の俳號を加生といふ春花園と稱す其妻登は羽紅を俳號とし芭蕉に師事す後ち京師に適き醫を業とし其友の罪を獲るに坐し獄に繋がれ後赦されて郷に歸る寶永四年某月歿す

二 素 然

傳燈大阿闍梨元徹和尚
素然は當寺住僧元徹の俳號なり東花坊支考金澤に留杖し歌仙を興行する時素然は秋の坊、北枝等と共に加はる

少林寺 裏傳馬町

一 宗峰 無學

無學は能書を以て聞え常に子弟を集めて教ゆ又旁ら詩歌俳句を能くす安政四年五月歿す

淨照寺 下傳馬町

一 非人 清光

王の志あり國事に盡す元治元年の事に坐し其家に飼せらる時に病あり同年九月獄成るに及ばずして歿す享年二十八

高巖寺 三楯

一 青木 芳齋

雲龍院殿雄峯宗英居士
芳齋通稱新兵衛管て浦生氏郷、上杉景勝に歴仕し後ち越前中納言秀康に仕へ足輕七十八人頭たり大阪役後嫡子正次の天死を悼み祿を辭し祝髪し阿房齋と稱す藩主前田利常其驍勇を聞き名馬並黄金を贈り之を招く祿五千石を食み足輕五十人を預かる寛永九年七月歿す

二 生駒 萬子

水園亭一道萬子居士
萬子生駒氏諱は重信通稱萬兵衛前田氏に仕

へ普請奉行、先筒頭等となる萬子は俳號なり別號を此君庵又水國庵といひ別墅を水國亭と名づく嘗て此に芭蕉、支考等遠來の俳人を迎ふ萬子は素堂木因と名を齊ふし芭蕉翁三友の一人に推稱せらる享保四年四月歿す享年六十六

三 和田 彦四郎 敏事軒徳寧紹清居士

彦四郎屋號を田上屋といふ淡水と號す廬賢、敏事軒の別號あり書を井出正水に學び高田方水、赤井得水と共に正水門下の三水と稱す享保十三年五月歿す

四 生駒 牛之介 敬章院殿涼山宗義大居士

牛之介は直藤字は清夫楓山と號す最も詩を善く才思醜ならず中道にして天才時に寶曆七年八月なり

五 生駒 直武 本明院殿心巖宗月居士

永十一年十一月歿す

二 津田 鳳卿 牛千院梧崗道董居士

鳳卿通稱亮之助梧崗と號す博聞強記能く文を作る嘗て藩主前田氏に仕へ書物奉行を以て書寫奉行を兼ね藩庫の書籍を整理し又大日本史の校正及註釋を命せらる鳳卿平生近郊に遊ぶ皆遊記あり其古蹟を記すや考證精該なり所著韓非子解詁全書世に行はる弘化四年四月歿す享年六十九

三 石川 兒遊

兒遊通稱文二所居を集雅堂と號す俳諧を以て著はる明治十三年七月歿す

四 森田 平次 柿園齋平次良見居士

平次諱は良見柿園と號す皇漢學を修め夙に

直武字は君烈通稱内膳柳亭と號し所居を兼松樓といふ伊藤莘野に従學す嘗て四書朱註四聲辨疑を著し又觀文書堂四書講義及び柳亭集を修録し詩賦は其緒餘なり寶曆十二年九月歿す享年六十八

六 端 丈庵 杏林院一叟丈庵老居士

丈庵字は千甫關嶼と號す醫を業とし詩を善く常に窮民に投劑して幣を受けず又酒食を設け調客を待つ天明七年八月歿す

放生寺 中橋町

一 津田 重久 自照院殿養安道供大居士

重久は系内大臣重盛に出づ累世伏見城主たり重久は遠江守と稱し晩に道供と號す努力衆に軼ぐ嘗て豊臣秀吉秀次に仕へ後ち來りて前田氏に仕ふ放生寺は其創むる所なり寛

三州書誌の編纂に志し國郡沿革考、萬葉事實餘情、加藩貨幣錄、北海邊要考、白山記攷證等所著數十種あり考證最も精確にして景周鳳卿と聲名を齊ふす明治四十一年十二月歿す享年八十六

願樂寺 長田町

一 深山 安良 安祥院

安良字は孟明通稱嘉右衛門陸渾又壺峰と號す家富む故多く奇書を購ひ博覽を極む天性詩に長じ遂に一時北陸詩賦の柄を執る又善く文を作り達意を主とす寶曆四年五月歿す

二 洲崎 原吉 眞識院釋智得明淨居士

原吉節堂と號す年壯京都に適き日野郡設等に就て醫學を習ひ金澤に歸り醫業を開く節堂漢學に精通し多く詩を作

る最も絶句に妙なり明治三十年六月歿す享年七十二

專光寺 田丸町

一 福増屋千代 釋纂園

千代は加賀石川郡福増村に産る本姓槻橋氏福増屋と號す多年四方に客遊し金澤に歸り安永四年九月歿す福増屋は本寺の門徒なるに由り寺内に葬る事は明治忌辰録、近世奇跡考等にも見えて誣ゆべからず後年忌辰に丁り松任聖興寺に法會を營み供養の爲寺内に石を築く所謂千代尼塚是なり

西福寺 新道

一 大神 彌七 法鼓堂信哉阿闍梨

彌七は崎人なり本姓大神氏加賀石川郡大野村の産といふ最も農事に精熟す此寺の太鼓

長久の作と容易に識別するを得す弘化二年正月歿す二代正光、三代某、四代正次、六代正保皆其業を繼ぎ世々三右衛門といふ其墓皆本寺に在り

上宮寺 五寶町

一 淺野屋 秋臺 釋無著

秋臺名は彦六嘗て右手肝煎等の職に在り恬澹にして書を能くす秋臺と號す初松花堂に習ひ後ら東坡の書風を學ぶ字を書するに飄逸佚蕩些の俗氣なし貫名海屋北游相見て推稱措かず戴笠道人、半僧道人、阮篋野王等十餘の別號あり文化十二年十月歿す

西勝寺 五寶町

一 堀 麥 水 實言院道密

の嗣は其作の豆殻を用ふといふ此寺初め古道の地に在り墓は古より其地内に在り因て後年其墓を移轉す彌七一日乘馬他出して歸らず其日を以て忌辰とすといふ

二 宮野 直道 證道院釋直道

直道嘗て金石町長に身を起し黨籍を政友會に置きて金澤市會議長、石川縣會議長等に歴就し又石川新聞社に社長となり之が經營の任に當る大正六年一月歿す享年六十五

光專寺 荒町二丁目

一 木越三右衛門 釋信成

三右衛門正之と稱す横河長久に就き冶業を習ひ十八歳の時天徳院の梵鐘を造る最も鍛瓶に得意にして技風は一種の特色あり其師

麥水は堀氏通稱長右衛門初め樗庵と稱し醫を業とす夙に俳諧を好み四方に漫遊して名ある俳人と風交を結び晩年醫を廢め専ら俳事に耽る又古今東西の史籍を涉獵し遂に俳書に新虛栗集等、雜書に三州奇談等、軍記に難波戰記等其他釋書、語話の類約二十有餘種の著作あり天明三年十月歿す其墓に題して遠山墳といふ

智覺寺 西堀川町

一 近藤 忠之丞 釋義詮信士

忠之丞の父雲田忠太夫は人持組藤田氏の家臣なり藩士山本某嘗て忠太夫より金を借り屢次催促せらるると雖未だ返償せず一夕其子孫三郎忠太夫を殺害す忠之丞憤慨して仇讐

せんと欲し武藝を勵み五年を経て天保十四年九月遂に譬を途に要して斬殺す

宗徳寺舊地 堀川角場町

一 水原清五郎

寛景院監温山清幽居士

清五郎諱は保延後清幽と號す弘化中馬廻組頭を以て金澤町奉行又算用場奉行を兼ね執政長連弘を輔け宿弊を釐革す清五郎殊に經濟の道に通じ能く財政を整理す弘化五年藩校明倫堂督學に任ず後富山藩の財政整理を命ぜらる後再び算用場奉行となり産物方を新設し國産の發達を謀る實に黒羽織黨中の重要人物なり明治五年十月歿す

了願寺 豊岡町

一 由比勝生

林光院諦譽智留居士

あり明治四十五年六月歿す享年五十

醫王寺 觀音町三丁目

一 關孝和

孝和は通稱新助自由と號す幼より數術に精し長ずるに及び天文曆算に通せざる所なし人稱して算聖となす晚年江戸に赴きて歿す因て江戸牛込淨輪寺に葬り寶永五年十月此處にも墓石を樹つといふ

二 松田東英

東英名は就芹齋と號す越中の南河内氏の仲子幼より讀書を喜ぶ醫術を習ふ終に金澤の醫松田氏の養嗣子となる江戸長崎に遊學し歸りて家業を繼ぐ天保中手づから顕微鏡望遠鏡を製作し藩主前田氏に獻す又狂歌を能くし作る所頗る多し明治二十二年十二月歿す享年八十

三 中村かしく

四〇

勝生名は新五郎藩の大小將に班し會所奉行となる後剃髮して暫留と號す六十歳以後日録する所のものを多毛登艸といふ公家の歴世臣僚の原譜法令文案等悉く載す又懷惠夜話、江金往還等著書多し享保四年十月歿す享年八十四

壽經寺 觀音町三丁目

一 能美屋佐吉等

安政六年米價騰貴細民飢に泣く途に卯辰山に登り聲を揚て飢を訴ふ其首魁七人皆臧首せらる河原市屋文右衛門、高橋屋彌左衛門、越中屋守兵衛、能美屋佐吉、原屋甚七、平田屋彌兵衛、北市屋市右衛門是なり

二 梅澤儀三郎

玉珠院通達儀信居士

儀三郎和算を能し教習館を起し子弟を教育す新撰算術、珠算教育、算術問題集等の著

かしくは中村富十郎の門人なり後名を菊川松之助と改む嘉永四年八月歿す

四 中村芝加十郎

芝加十郎は市川小圓次の門人にて初中村松之助といふ後中村芝十郎の門弟となり名を芝加十郎と改む明治三年十月歿す

慈雲寺 木綿町

一 富田重政

慈雲院殿前越州日慈大居士

重政は劍法富田流の祖景政に養はる年少前田利家に仕へ毎に軍に従うて先鋒たり從五位下に叙し下野守に任せらる後越後守と改む慶長四年利家徳川家康を伏見に訪ふや重政家臣を率ゐる貼銀柄の鉦乃槍十根を樹て之に従ふ利家大に喜ぶ寛永二年四月歿す

四一

二 奥村 愛 一相院殿青楓妙解日味大姉

愛は富田景周の母なり青楓と號す七歳既に自ら和歌を詠じ長じて亞相冷泉爲村の門に従ひ又詩を嗜む著す所青楓秋露等數部あり寛永二年十月歿す

三 富田 重員 慈願院殿詠月日情居士

重員通稱治部左衛門雪山と號す頓智あり訴訟に裁決すること流る、如し老吏復た一咳を容れず詩を好み恒に同人と飲盡す享保四年七月歿す享年五十九

四 富田 好禮 歸邦院本覺日悟居士

好禮通稱彦左衛門春郭と號す藩主重致に封事を献じ忠言を稱せらる重致薨後罪を獲獄中秋懷七律八首を賦し指頭を嚼み其血を以て書し越中五箇山に謫居すること三十五年論語餘訓、政則等を著す文政四年赦に値ひて歸り越えて六年四月歿す

鶯谷

一 山川北宗齋 釋善靜

北宗齋は孝次老後の號なり嘗て山屋八十吉と稱し柳川春茂の門に入り白銀職を營む鑽痕優麗にして瀟洒一時稱して加賀宗珉といふ明治十五年十二月歿す享年五十五

宗龍寺 鶯町

一 佛后 惟宗

惟宗は學徳共に名あり殊に詩を能くす嘗て本寺に住し僧堂を建て雲衲の修養に資す文化十三年八月寂す

二 賀古 群吾郎 寬隆院機應宗鑑居士

群吾郎字は伯操觀湖と號す伊藤石菴に師事し好んで詩を作る組外番頭たり文政元年四月歿す

五 富田 景周 春雲院殿癡龍日暮大居士

景周富田家の支族なり癡龍と號す櫻寧齋、樂地堂、暮松樓等別號多し嘗て小松城番、算用場奉行、出銀奉行等に歷任す常に意を藩史の考究に用ひ越登賀三州志、燕臺風雅等六十餘種を著し世人を益し史家に利す又下學老談あり日常の事を教へ親切周到を極む時人一部の論語を以て目す文政十一年十月歿す享年八十三

六 富田 景煥 松柏院殿清操瓊坡居士

景煥は景周の嫡男なり初與六郎後織部と稱す鶴坡と號す漢籍に通じ善く文を屬す文政元年家を繼ぎ同十一年致仕し天保九年八月歿す

普明院 下小川町

一 阪井 就安 泰屋就安居士

就安は甫庵の男なり醫を以て前田氏に仕ふ利常の命に依り嘗て犀川の礦を埋め町地となす今の片町、河原町、大工町及堅町等は此時に成る寛永十五年七月歿す

二 小瀬 道喜 甫庵道喜居士

道喜通稱又四郎又長大夫と稱す甫庵は其號、美濃土岐氏の庶流なり關白豊臣秀次に仕へ秀次亡び堀尾氏に仕へ松江城の築構を董す晩年前田氏の聘に應じ金澤に來る甫庵易學に通じ鈴箱の奥儀に達す太閤記、信長記、太閤軍記、天正軍記、童蒙先習等の著あり又狂歌を善くす寛永十七年八月歿す

三 小瀬 復庵 不老齋外支那居士

復庵名は良正桃溪と號す刀圭の術に精通し又詩を巧にし嘗て朝鮮の學士と唱和す新井白石ただ其才藻を稱す又歌學に志し秀句少からず享保三年八月歿す

四 草薙 尙志 修禪院尙堂願志居士

尙志嘗て石川縣會副議長たり又北雄社に副社長たり明治四十一年十月歿す

玄門寺 下小川町

一 庄田 晴江 德譽義岳晴江居士

晴江は次郎兵衛の俳號なり後ち二條家の門人並と爲り出入を許さる因て私に花の本と稱す又能樂を能くす明治十四年十二月歿す

眞成寺 上小川町

といふ天明元年八月没す享年五十四

長久寺 眞金屋町

一 北祠堂 南龍 妙法院日歌居士

南龍は本姓石橋氏講談師伊東北燕の弟子なり後一口密一夢に従ふて新業を修む明治十八年四月歿す

二 杉村 寛正 夏岳院寛正日達居士

寛正初名宗太郎藩士なり嘗て大阪の兵學校に學び一時姓名を藤勉一と改め同志と忠告社を起して政治を論じ其牛耳を執る後能美郡長に任せられ衆議院議員に選出せられ晩年石川縣勸業博物館長となる後辭して閑地に在り大正五年六月歿す享年七十三

三 佐藤 文太郎 事正院文輝日讓居士

文太郎夙に縣下郡市各小學校長に歴任し石

一 中村歌右衛門 涼池院蓮淨日濟禪門

歌右衛門は金澤の醫大關俊安の子なり少字柴之介夙に江戸に出で俳優と爲り遂に盛名を天下に馳せ初代加賀屋と稱す一時畫壇の老将岸駒、角界の横綱阿武松緑之助と共に加州藩出身の三傑と稱せらる寛政三年十月歿す享年七十四

西養寺 上小川町

一 宮竹屋 小春 徧雨慈龍居士

小春通稱伊右衛門片町に居り酒造を業とす所居を小春庵又白鷗齋と號す芭蕉行脚して此に留杖せりといふ享保三年五月歿す

二 齋藤 金兵衛 交誼院覺練義道沙彌

金兵衛諱は之韶初清太郎といふ鐵砲奉行、改作奉行等たり武藝者にして最も居合の術に長じ一時能く及ぶ者なし

川郡視學、石川縣視學等を歴明治四十一年石川縣育成院の始めて成るや其院長を命ぜられ大正五年四月歿す

妙應寺 眞金屋町

一 西坂 錫 白峰院正錫日裏居士

錫字は天錫成庵と號す江戸の昌平營に遊び安積良齋、古賀侗庵等と交る在叢中藩祖盛烈記を著す既にして藩に歸り藩命に依り四書滙參、監本四書、欽定四經等を校正し新番徒士を以て藩校明倫堂助教たり文久二年七月歿す

二 西坂 辰之助

辰之助諱は宣字は君迪、錫の弟なり學を好み筆札を善くす又凡百の末技に巧にして殊

に樂器の製作に長じ嘗て創意して笛及笙を製し京洛の製と毫釐を差へず金澤にて樂器を製する實に辰之助を以て始とす安政三年五月歿す

三 西坂 丙四郎 正忠院友孝日其居士

丙四郎は藩の定番御歩を勤仕す明治元年軍に従ひ越後長岡城を攻め五月十八日信濃川にて大砲を以て敵艦を攻撃す副砲なる時糧食ノ敵彈に中りて斃る

光覺寺 山ノ上町二丁目

一 田中躬之

躬之通稱兵庫、菊園と號す少壯京都に遊び皇學を加茂季應に受け醫術を新宮涼庭に習ふ藩に歸り醫を業とす躬之讀書精敏古風の歌を好む藩校明倫堂に皇學を講じ尋で訓導

一步は藩の執政前田氏の家臣なり初名孫市嘗て山城國宇治に往き製茶法を習ひ歸りて江能二郡の當業者に其方法を教へ海外の輸出に適せしむ尋で廢藩に際し金澤市内外の空地に茶種を播し栽培を奨め製茶の改良振興に努力し功績多く屢々官より賞賜せらる茶園栽培初習を著し刊して當業者に頒つ一步又表流不審庵宗左の直門人にて斯道の奧儀を究む明治四十二年三月歿す享年八十

五 武村 彌吉 究院院釋淨良

武村氏の遠祖は河内國狹山郷大保の治工天明國家の族にして仁平中百八燈籠を調貢したる諸家の一なり寛永中金澤に來り累世鐵物業を開く彌吉幼名貞吉、貞英と稱す明治

に補す躬之夙に尊王の志厚く諸生を導くに忠愛の道を以てす青木秀枝、淺野屋佐平等の志士皆其門に出づ又門人石黒千尋、高橋富兄、狩谷竹柄等皆著る安政四年七月歿す享年六十二

二 越前屋 柳壺 六陽軒親月宗鑑居士

柳壺は六兵衛の俳號なり別號を守泉堂といふ俳諧を以て名あり岡幸亭第五世なり明治七年九月歿す

三 田中 猛之

猛之通稱外衛、躬之の嫡男なり亦兵庫と號す藩老今村氏の醫となる猛之亦皇學に精く和歌を能くす嘗て藩校明倫堂に皇學を講じ明治維新の後皇學訓導、文學訓導等となる明治十年五月歿す

四 近藤 一步 自適院松風和樂 一步居士

十一年車駕北巡の時調貢の様式に依り鐵燈籠を鑄造して行在所に捧獻し嘉納せらる嘗て市會議員、商業會議所議員等たり大正六年十一月歿す

乘光寺支坊 山ノ上町三丁目

一 高井 濟永

濟永幼名彌市郎小阪神社(舊名春日)の祠官周防守長頼の次子なり父に繼で四十餘社の神職を兼ね文化五年周防守に任じ藩命に依り社家觸頭役を勤む濟永二白と號し別號を巽齋といふ常に好んで墨竹を描く師承詳ならず或は山崎雲山に就て習ふといふ衆其絶妙を賞す又有職故實に通じ雅樂も最も風簫を善くす安政二年十月歿す享年七十餘

月心寺

高道新町

一 千宗室

仙叟宗室居士

宗室は裏千家の祖なり茶道を千宗佐に學び仙叟と號し今日庵に住す之を裏といふ藩主前田氏に仕ふ元祿十年正月歿す

二 大樋長左衛門

長左衛門は京都の人寛文六年藩主前田氏に召され京都より金澤に來り大樋町に居住す因りて大樋を氏とす茶器を製造す所謂大樋燒是なり正徳二年正月歿す子孫連綿として其業を繼ぐ

妙圓寺

高道新町

一 河野四郎右衛門

四郎右衛門諱は通成初九曾と號し後鴻齋と改む文化中藩

り皆此に葬る

三 寺島藏人

乾泉寺靜閑隱養居士

藏人諱は焯、應養と號す高岡町奉行、普請奉行、改作奉行及馬廻頭等に歴任す經濟に精通し卓見群を抜く遂に漫に國政を非議するの罪を以て天保八年能登島に謫せられ翌年九月配所に歿す享年六十二藏人壽を能くし晩年意を文學に恣にし墨竹最も世に賞せらる

全性寺

高道町

一 諸橋權之進

春山院旭光日見居士

權之進の家世、能樂師たり權之進は天保十二年正月歿す後姓を相馬に改む

二 寶生紫雪

五月庵紫雪日光居士

の大小將となり又藩校明倫堂に書を講ず天保中世子の傳を経て弓頭を以て異風錢許を兼ね安政七年歿す享年六十

心蓮社

高道新町

一 立花北枝

原超北枝信士

北枝は通稱次郎右衛門劔刀を業とす聰敏にして蕉風の妙境を究め趙翠臺、鳥翠、廓趙、百鶴園と稱す蕉門十哲の一人にして人稱して北陸の俳祖となす花月傳、金言抄、山中問答等其他俳書著多し享保三年五月歿す

二 横河長久

敦永

長久通稱九左衛門之を横河氏中興初代とす其技精巧初代寒雉以來の名手と稱す作品は銅鐵共に一種の風あり點茶家殊に賞玩す文政の末歿す二代長久、三代長久皆技に工な

紫雪は本姓服部氏、寶生家元九郎の父なり

金澤に來住し藩主前田氏の眷遇を蒙る文久三年七月歿す

三 服部彌五郎

吟樞院植表日芳居士

彌五郎は金澤の人にして紫雪の女婿なり父直江權三郎は能樂師なり彌五郎亦能樂を能くす明治元年十月歿す

四 村松董平

榮教院慈徳日董信士

村松氏家世、江戸三度の仲間なり八世徳左衛門並に九世徳左衛門は其棟取役を命せらる九世徳左衛門後名を董平と改め最も其業に精勤なり明治十七年十月歿す享年五十一

五 波吉宮門

華月庵紅雪日照居士

宮門の家世、能樂師たり當主宮門の父なり

明治十八年十月歿す

六 相馬 勝之 賢勝院明光日教居士

勝之家業を繼で能樂師たり聲聞あり明治二十八年二月歿す

本光寺 高道町

一 堀越 雀翁 本成院珍雄日光居士

堀越氏は藩の壁塗なり初代左源次は阿北齋雀翁と號す人と爲り巧慧多能最も狂歌の奥秘を極め佳句名吟口を衝て出で毫も推敲を費さず時人稱して加賀の蜀山人といふ歌集あり文政七年八月歿す

二 縫屋 定五郎 宿直院諦善日定信士

定五郎は屋號を大和屋といふ細縫を業こす資性篤實にして仁俠を喜み遠近俠客の間に重きを成せり軼事傳ふべき

もの多し弘化四年四月歿す享年三十三

三 堀越 音琴 本覺院常住日長居士

堀越氏二代左源次は物々庵音琴と號す父雀翁に習ひて狂歌を能くす萬延元年五月歿す

妙國寺 高道町

一成田 蒼虬 祥彰院蒼虬日幽居士

蒼虬は藩士なり武藝を講じ傍ら園更に従うて俳諧を能くす南無庵を繼ぐ後仕を辭して京都に入り蕉風の俳諧大に衰ふを嘆じ刻苦精練遂に芭蕉の本旨を得蕉門中興の人と稱す天保十三年三月歿す享年八十三

蓮覺寺 高道町

一 板屋 兵四郎

兵四郎は加賀小松の人算數を能くし機智に

富む寛永九年藩主利常の命に依り辰巳用水を疏鑿し始めて金澤城の用水を實たす又藩の領内に於て用水を疏し山野を拓くこと多し寛永十三年十月非命に死す乃ち河北郡袋村八幡社に合祀し袋の神と稱す子孫木屋の號を冒す

蓮昌寺 卯辰高町

一 秋 之 坊 寂玄院日明法師

秋之坊は加賀鶴來の人金澤に出で藩に仕ふ後僧となり寂玄と號し本寺に住す嘗て俳諧を以て諸州に遍遊し芭蕉を幻住庵に訪ふて風交を結ぶ享保三年正月歿す

淨光寺 中枚町

一 中條 茂余 釋稱諱

茂余本姓山田氏出でて中條氏を繼ぐ夙に漢學國學を習ひ佛典と易學を自修す又鼈鼓に長し和歌を能くす所著に住吉物語校註あり明治三十九年二月歿す享年五十四

善導寺 山ノ上町二丁目

一 館屋 如柳 釋了意

如柳通稱長右衛門家を御館屋と號し所居を松裏庵といふ俳諧を善くす芭蕉を師とし北枝と親交あり寶曆七年三月歿す

二 館屋 如本 釋詩念

如本通稱權兵衛俳諧を能くし希四門下の上足なり養父如柳の松裏庵を繼席す明和八年十一月歿す

三 館屋 世涼 釋惠授

世涼通稱大兵衛後川門下の上足なり百龜園と號す文化五年三月歿す

四 館屋 宇收 釋賢證

字牧は通稱平七車大門下の俳人にて蒼虬と相替し暮柳會を總席し天保八年三月歿す

五 爲谷 庄米 專學西念居士

庄米は莊平の號なり爲町地内爲谷に住し其地を以て氏とす明治五年の頃久田黨の讓を受け九谷燒の素磁を製造し經營する所あり十八年其業を野崎佐吉等に譲り更に油木山に一小窯を起し専ら製陶に従事し間々精巧のものを作る明治四十五年三月歿す享年八十三

誓願寺 上小川町

一 徳田 寛所 雅匠院寛所適器居士

寛所名は澂、字は子志後名適字子宜に改む書は初文徵明を學び後に仁風の風を好み畫は南北折衷派を取る又善く詩を作る明治二

友山通稱澂二幼より陶器を好み夙に新業を營む明治五年着書工場を起す技巧能く古九谷を模し得意の作は眞偽を識別し能はざるものありといふ大正三年三月歿す

乘善寺 鍛冶町

一 高桑善五郎 觀慈院釋祐臨居士

高桑氏は藩士なり初世善五郎尤も易術に精妙なり子孫襲承し易術を藩士に教ふ又大聖寺藩主にも指南す善五郎は元祿四年十二月を以て歿す享年詳ならず

實成寺(追加) 野田寺町四丁目

七 芝木 昌平

昌平初め昌之進といふ藩命に依り長崎に遊學し歸りて壯猶館等に於て子弟に英學を教へ又兵法天文歴史に關する原書を翻譯し英

十一年一月歿す享年六十五

養法寺 談議所

一 菅 專助 信誓法師

專助は能登菅原の明專寺に生る名は智洞專助は其號なり院本戯曲の類を好み筆を淨瑠璃本の作に染め大阪豊竹座の座附作者となりお染久松染模様妹背門松、揚卷助六紙子仕立兩面鏡、お半長右衛門桂川連理柵等を作りて上場し尙自作及び合作のもの數十種あり晩年金澤に歸り養法寺を再興す專助又佛典に精通し説法魏々編等を著す安永八年十月寂す

徳龍寺 千日町

一 笹田 友山 釋藏徳

和辭書を編纂す後海軍省に出仕し明治十八年職を罷む後歸りて英文學館を起し育英に従事す明治二十六年八月歿す

長久寺(追加) 裏金屋町

四 嶋田 定靜 風學院定靜日進居士

定靜初幸四郎と稱し後伴六と改む臥雲と號す河波多仲の第二子出で、藩士島田氏の養嗣子となる夙に家學を受け嘗て金澤藩文學訓蒙、石川縣師範學校助教、同教諭等たり又學半書塾を開き公餘子弟に教ゆ從游する者頗る衆し明治二十六年六月歿す享年六十二

大谷廟所 西町二番丁

存 如

存如は本願寺第七世の法主にて初金澤城内

二ノ丸の隅に在り文明三年其子述如其處に葬る明治十四年此地神護寺の跡に移し大谷廟所と稱ふ

四ツ山

野田寺町二丁目 郊端の裏

一 陸原大次郎

大次郎之淳と稱す越中の醫陸原順哲の孫なり享和中京都に遊學し歸りて藩老奥村氏の儒臣となり後藩主前田氏に徵さる天保二年藩校明倫堂助教となり尋で藩主齊泰の爲に講書し又世子慶寧の侍讀となる十年明倫堂

教授となり大小將組、納戸奉行等に歷職し屢江戸に祇役す嘗て松雲公座右銘講解を著す嘉永五年隱退し名を韋齋と改む安政五年二月歿す

二 大友久米滿

久米滿通稱儀左衛門蓬壺と號す橘守部の門人なり短歌長歌國文皆之を能くし又書に巧なり從遊する者衆し明治四年二月歿す

三 金浦 鷲橋

鷲橋は甘外の男神職なり俳事を能くす立机して園琴と稱す明治十三年三月歿す享年六十六

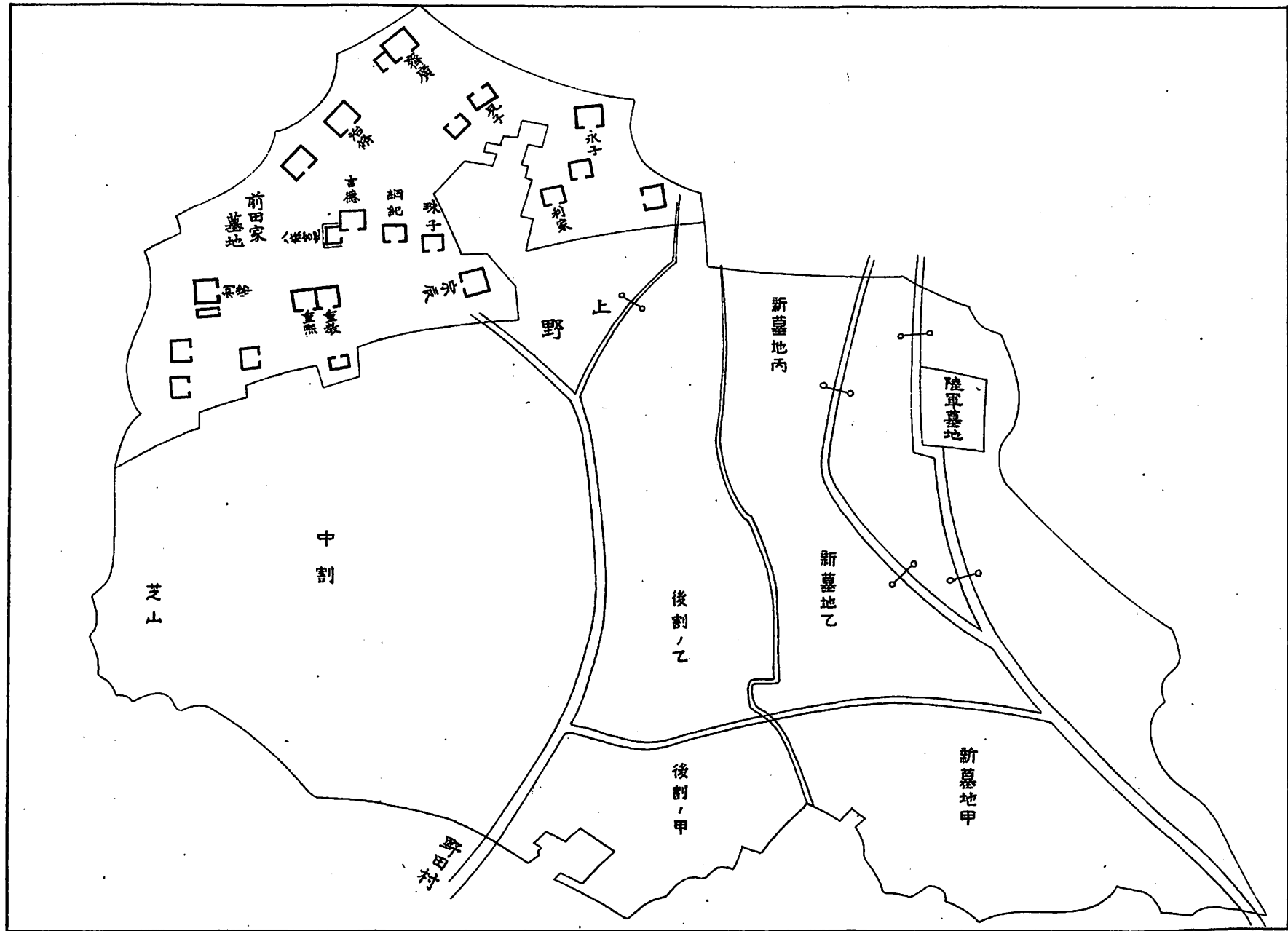
金澤墓誌上篇終

天 主 一 郡 從 子 年 而 に 俊 事 大 正

衛門に改む尾張荒子城主前田利春の第五子

十五年と爾多く方角し在る月ヲ見し聖

野田山共有墓地圖



著年

門均

稱

金澤墓誌

下編

尙軒 和田文次郎編

野田山有共墓地

一 八條宮妃

眞照院殿光岳宗春大姉
大居士

藩主前田利常の第四女富姫は元和七年七月
誕生寛永十八年九月八條宮智忠親王の妃に
立たれ寛文二年八月京師に於て薨す享年四
十二金澤に還葬す

二 前田利家

高徳院殿桃葉淨見
大居士

利家幼名犬千代長じて孫四郎と稱し後又左
衛門に改む尾張荒子城主前田利春の第五子

夙に武名あり織田氏に仕へ連に戦功あり天
正三年越前府中に封せられ九年能登の國主
となる豊臣氏天下に覇たるに及び加賀二郡
を加封す後越中を其子利長に賜ふ利家官從
二位權大納言に至り慶長四年三月薨す享年
六十二人と爲り寛宏にして義を重んじ常に
舊故に厚し秀吉薨するに臨み託するに後事
を以てす當時海内の政利家と徳川家康とに
決す又平居皇室を重じ歳次に物を献す天正
十五年以降多く京師に住み屢天顔を拜し聖

恩の辱きに感じて子孫に遺訓し王事に勤めしむ朝廷其忠貞を嘉し従一位を贈らる

三 前田利常

微砂院殿一峯元
乾大居士

利常幼名猿千代、後犬千代に改む初諱利光といふ利家の第四子なり慶長十年封を襲ぐ之を第三世とす尋で参議に任ず寛永十六年封を世子光高に譲り小松に退老す正保二年光高暴に薨じ嗣子綱紀封を襲ぎ尙幼なるを以て再び國政を與り聞く萬治元年十月小松城に薨す享年六十六、從三位權中納言に至る利常夙に皇室の式微を慨し陰に輔翼せんと欲するの志あり又徳川幕府の忌諱を避けて前田氏の根柢を固くし三州昇平の基を開く治績觀るべきもの多し

四 前田綱紀

松雲院殿徳翁一齊
大居士

綱紀は光高の長子從三位に叙し参議左近衛權中將兼加賀守に任ず第五世の藩主なり甫めて三歳封を襲ぐ夙に木下順庵、明儒朱舜水等を師とし又外舅徳川光圀の愛撫訓助する所となる寛文元年十九始めて封に就く大に制度憲章を釐革し勤儉の風を興す常に深く皇室の式微を慨き南朝忠烈の事績を表し朝儀典禮の保存を謀り屢靈元天皇の寵眷を蒙る享保九年封を嗣子吉徳に譲り翌年五月薨す享年八十二

五 前田吉徳

徳國院殿佛鑑法性
大居士

吉徳は綱紀の第四子なり享保八年五月封を襲ぐ之を第六世とす正四位下参議たり元文

元年中宮入内の時供御料少く朝廷儀典を擧

るの資に乏し吉徳之を開き米二千石金貳百兩を献す晩年病みて親ら事を視ると能はず大槻内藏允遂に其私を逞うせんとし一時紛擾を生ず延享二年六月薨す享年五十六

六 前田宗辰

大聖院殿梅園雪
峯大居士

宗辰は吉徳の長子なり延享二年七月封を襲ぐ之を第七世とす正四位下左近衛權中將たり三年十二月薨す享年二十二

七 前田重熙

徳徳院殿耕市尚
古大居士

重熙は吉徳の第二子なり延享四年正月封を襲ぐ之を第八世とす正四位下左近衛權中將たり寶曆三年四月薨す享年二十五

八 前田重教

泰雲院殿仁山彰
壽大居士

重教は吉徳の第七子なり寶曆四年三月封を襲ぐ即ち藩主第十世たり官位は正四位下左近衛權中將たり文武の諸技に該通し心力を落治に勵ます然れども前代の積弊深く人心を害し政令行はれず風俗の澆漓未だ遂に矯むべからず愛憤病を作し遂に封を讓る天明六年六月薨す享年四十六

九 前田治脩

大梁院殿後山徳
英大居士

治脩は吉徳の第十子幼名時次郎越中勝興寺の住職となり寶曆十一年西本願寺法主に謁し其猶子となり得度して闍真と稱す明和七年重教退老の意を決す而て未だ男子なし乃ち翌年治脩をして讓を受けしむ之を藩主第

十一世とす官位は正四位下參議たり治脩治務に淬勵し儉素を以て衆を率の闊藩感化を受けざるなし寛政四年三月始めて文武の兩學校を開き文を明倫堂武を經武館と名づく治く四民に令し就て教を受けしむ享和二年退老し文化七年正月薨す享年六十六

十 前田 齊 廣 金龍院殿文吉暨 遊大居士

齊廣は重教の第二子なり享和二年襲封し藩主第十二世となる齊廣尤も學を好み學士を招祿し人材を擢用す此時を以て西洋學大に藩内に行はる文政五年封を子齊泰に譲る七年七月薨す享年四十三

十一 前田 永子 玉泉院殿松殿水添大姉
永子は織田信長の四女藩主利長の夫人なり

卿を除かんと欲し長連蒙、脇田巧一、杉本乙菊、杉村文一、淺井壽篤等同志と謀り十二年五月大久保を參朝の途に要し急に襲て之を斫り官に自首す因て六人俱に斬に處せらる連蒙等五人の墓は一良の墓と相並ぶ

十五 三角 風藏 〔後割甲一四二八〕

風藏通稱庄右衛門江戸の藩邸に居て本多利明に測量術を受く歸りて藩主に仕ふ藩主屢其操る所の風砲射術を視る嘗て金澤市街を測量し其圖精巧なり又封内の鑛山を測量す明治元年四月歿す享年八十五

十六 香林坊 有次 釋心章〔後割甲九三〇〕

有次桃里と號す本姓向田氏少うして書畫を好み喜で書を讀み數く人の急厄を救ふ金澤

元和九年二月歿す享年五十九

十二 前田 珠子 天總院殿乾蓮淨貞 大禪定尼

珠子は徳川秀忠の二女藩主利常の夫人なり元和八年七月歿す享年二十四

十三 前田 夙子 眞龍院

夙子は應司准后政熙の女藩主齊廣の夫人なり明治三年六月歿す享年八十六

十四 島田 一良 〔以上前田家墓地〕

一良は藩の足輕なり藩の兵制改革の時累進して大尉となる又陸軍武官齋藤某に就き兵學を學ぶ後金澤に歸り忠告社に入り政論に従事し激論家の名あり明治十年西南の役起るや兵を擧げて應せんとなす及ばずして亂平ぐ因て西郷隆盛を殺せし首謀者大久保内務

藩の時金澤市長に擧げらる明治四年老を告げ翰墨を以て自ら娛む九年十二月歿す年五十五

十七 今川 胖藏

胖藏字は元穀淡山又餐霞樓清史と號す中頃今川氏を冒す父祖伴田流作鑑の法を善くす夙に江戸昌平靈に學び又京師に往き頼襄に従うて業を受け經術文章並び進む歸りて藩校明倫堂假助教となり新番組に班す後辭して諸生に教ゆ安政三年三月歿す

十八 柴野 美啓 〔中割一〇五二〕

美啓通稱雄次郎算數に長じ又天文學に通じ夙に一家を成す又龜尾記を著はし金澤市中及附近の名所舊蹟等の由來を叙し其考證據

るべきものあり弘化四年八月歿す

十九 酢屋 權七〔後割甲七六五〕

權七は金澤歌舞伎俳優の始祖なり慶長十年將軍徳川秀忠の女孫姫織に六歳藩主前田利常に來嫁す權七其與に立ち鳥帽子に直垂の扮装に、小歌謡ひて諸藝をなし江戸より金澤に至り道中の無聊を慰む天和元年十一月歿す

二十 小林 大納言〔後割甲八九二〕

小林重昌初め大納言と稱し後ち彌六左衛門と改む武名あり佐久間盛政に仕へ志津嶽の戦に殊功あり又能登末祿の役戦功あり後前田利政に従ひ能州に在り慶長三年七月歿す

二十一 飯嶋 珈涼〔後割甲五三〇〕

珈涼に五々の妻なり號を以て通稱とし金城一婦人の別號あり帯因を師とし俳諧を研究す夫の死後齋髪して俳三味に入る明和八年十一月歿す享年七十六

二十二 龜田 鶴山〔後割甲三二四〕

鶴山名は章、通稱純藏、別號を鹿心齋といふ詩賦を喜み墨梅を善くす家を宮竹屋と號し家柄町人に列し金澤町年寄銀坐兩役を勤む文化四年青木木米を招き春日山に陶窯を起し陶器を製造す春日山燒是なり天保五年九月歿す

二十三 橋 往來〔中割一六七五〕

往來名は敬字は子義通稱往來、石調、閒遊皆其號なり幼時橋親齋に書を學ぶ後唐宗名家の法帖を臨し遂に一機軸を出す藝を開き徒に授く廢藩の前後藩の書寫役又文學訓導等となる明治十三年七月歿す年六十二

二十四 高橋 富兄〔中割一四三三〕

富兄父を富有といふ夙に國學を田中躬之に

治四十四年十月歿す享年七十九

二十六 山納 賢吉〔後割甲二八〇〕

賢吉山納と號す書家なり門弟甚多し後小學校教師となる明治二十八年十一月歿す享年六十餘

二十七 鹿田 文平〔後割甲五〕

文平は藩の小人頭鹿田正復の子なり年少京師の小石玄瑞に従ひ醫を學び洋書を讀む學成りて歸り醫を業とす會々松代藩に聘せられ西洋兵書を翻譯す居ること歳餘復た歸りて西洋流火術方履となり壯猶館に在りて洋書翻譯を掌る又砲臺建築の爲能登海岸を巡る大砲方裁許、陣營次長、權少屬、英學教師等に歷任す比律中外貨幣篇を著し戰鬪紀事、攻守略説、天象解等を譯す明治四年正月歿す享年五十七

學び造詣最深し梅園又古學會と號す嘉永中藩校明倫堂の國學講師となり以て明治の初に及ぶ廢藩の後石川縣に吏たり又第四高等學校教授に任せられ其他各學校に教職を奉ず嘗て日本文法問答、國文軌範、十訓抄等の著あり又音韻を究め語彙字典を編む富兄殊に和歌を嗜み佐々木弘綱等と親交あり門人頗る多し大正二年十二月歿す享年九十

二十五 安木田 賴方〔後割乙二六五〕

賴方舊名を安田淳平といふ夙に藩校明倫堂に入り漢學を受け皇典を學び稍長じて持明院基政に入門し筆道の奥儀を皆傳し又和歌連歌を能す明治維新の後或は神社に祠官を學校に教師を奉職し常に尊皇敬神を説く明

二十八 五十嵐長左衛門「後割甲八五四」

蒔繪師五十嵐氏の始祖庄兵衛は五十嵐道甫の門人なり累世其職を繼ぎ技風温雅を以て稱せらる

二十九 橋 健 堂「後割甲六二三」

健堂諱は鶴字は反求蘭亭と號す兄健堂の後を承け筆翰句讀を徒に授く亦健堂と稱す嘗て金澤藩文學訓導等となる廢藩の後小學校に出仕す明治十四年十二月歿す享年五十九

三十 嵐 冠 十 郎持法院冠立日要居士
「中割四」

冠十郎は河合長藏の子なり俳優三樹大虎に從ひ西京に到る年甫めて十二冠十郎の門に入り名を橘藏又冠舎と改む遂に出藍の名あり尋で師の名跡を襲ぐ門人頗る衆し安政六

年歸りて川上劇場の座頭となる元治元年三年歿す享年四十六

三十一 松 平 大 貳禮興院殿忠孝義進
居士「中割二八」

大貳は康正の通稱なり祿四千石を食む嘗て小松城番、算用場奉行に歷任し藩の世子慶寧の側用人となり家老職に進む元治元年京師に駐り藩務を總管し慶寧の意見を陳す久しからずして七月十九日の事あり在藩老臣責を隨從の臣僚に歸す大貳慨然罪を一身に負はんと欲し近江海津の旅舎に於て屠腹して死す年四十二後朝廷其死勤王の事に關するを以て追賞し從四位を贈らる

三十二 高 島 米 積「中割三五二」

米積通稱鍋屋伊兵衛藏宿を樂とす田中躬之に就き歌道を

學び皇學を修む多太神社、小阪神社祠官に歷補し三浦儀三と稱し有賀廼舎と號す明治十年六月歿す享年七十五

三十三 高 島 米 護「中割三五二」

米護通稱伊平紀堂と號す米積の子なり家業を繼ぐ田中躬之に就き歌道を學ぶ又茶道に精し嘗て藩の商法局用係、七尾縣廳出仕となる紀堂茶話を著す明治三十四年五月歿す享年七十二

三十四 青 木 秀 枝「後割乙四四八」

秀枝通稱新三郎藩の料理人たり屢藩主齊泰、世子慶寧に從ひて江戸に往き橘冬照に從ひ國史律令及萬葉集を研究す安政四年明倫堂に國學を講ず千秋順之助等諸士と協戮し勤王説を唱へ藩主に上誓し勤王の大義を論ず既にして慶寧に從ひ京師に至り諸藩の志士

と交はる慶寧京師を退去するに及び藩之を責め從士を刑に行ふ秀枝亦捕へられ命に依り屠腹す年三十二後正五位を贈らる

三十五 金 子 清 三 郎「中割二〇二」

清三郎諱は清、字は士成松洞と號す、祖父鶴郎以來三世儒を以て藩老今枝氏に仕ふ少壯京師に之き文法を巽遜齋に受け又江戸昌平疊に入る明治の初藩校明倫堂に教職たり後石川縣專門學校教諭に任ず八年十二月歿す享年四十三著す所三體詩解、作文楷梯あり

三十六 淺 加 九 之 丞大原院室岳禪忠居士
「後割乙五三八」

九之丞山井と號す藩士なり國史を誦し典故に精し嘗て徒然草の語氣通じ難く諸註謬多きを病ひ徒然草諸抄大成二十卷を著す爾來

徒然草を讀む者此の書を唯一の津梁となす
尙著す所本朝群籍撰考、四不語錄等多し
享保十二年二月歿す享年七十一

三十七 關屋 政春 豐原院文學外居士
一中割六五二

政春は寛永十五年藩主前田氏に事へ馬廻組
大小將組に歷職す武技を嗜み劍槍の術に長
す又兵法の秘訣を知る後先簡頭に進む貞享
二年十二月歿す享年七十一政春恒に韜略を
講ず嘗て神儒佛三教一致の理を講じ以て子
弟を誘掖す著す所乙夜之書物、古兵談あり
古兵談には木下順庵等當時の儒者の言説を
録す

三十八 奥村 尙之

尙之通稱源左衛門初勝五郎といふ葵香番、出銀奉行等に

四十一 澤田 義門 「中割一六三三」

義門諱齊と號す藩の馬廻組たり初藩校明倫堂講師となる
後諸職に累遷し尋で盜賊改方奉行、金澤町奉行に歴任し
天保八年正月歿す年五十九義門文武に精し機智あり善く
世情に通ず盜賊改方等に在官の日一時加賀の大岡越前守
を以て目せらる

四十二 瀧川 新平 「中割一五七九」

新平諱は有父字は子龍、崇山又規矩亭と
號す藩士なり三池流の算學を修め更に算學
の蘊奥を究めんと欲し諸書を涉獵し遂に
自ら一家を成し瀧川流と號し諸生に教授す
文政以降算用者等に歴任し弘化元年九月歿
す享年五十八所著に未詳算法、神壁算法別
術精要、算法別術、算法探索諺解等多し

四十三 奥村 尙寬 智徳院殿本末不著居士
「中割一六八四」

歴任す尙之齋と號す祖訓を継ぎ文藝に嫺ふ喜んで泛交
を結ぶ天保十二年十二月歿す

三十九 奥村 修運

修運字は子復通稱源左衛門天遊と號す室鳩
巢に從學し室門七子の冠たり鳩巢嘗て其志
行の儉素を稱す其司獄に官たる時其斷決多
く儒術を以て之を縁飾す享保十八年七月歿
す享年六十四

四十 橋 觀 齋 「中割一〇三八」

觀齋諱は應、字は子畢有朋と號す能登の人
少壯書を善す細谷半齋、龍早庵に従ひ其筆
法を受け遂に一家を成し六體皆善くす金澤
に居て書を以て業とす尋で源黃州より額幟
及び凡百書式の傳を受く門弟頗る衆し天保
十一年六月歿す享年七十六

尙寬通稱助右衛門從五位下に叙し河内守に

任す寛政四年藩校明倫堂の奉行となり書策
する所多し後金澤城代となる夙に學殖あり
著作多し又易を新井白蛾に受け其蘊奥を極
む享和三年十二月歿す享年四十八

四十四 奥村 彈正

彈正諱は忠順、字は履信嘗て算用場奉行た
り彈正は伯亮盈進又竹溪と號す事を讓する
毎に博く衆善を采る特に書を讀み詩歌を能
し室門七弟の一人と稱す寛延三年歿す享年
七十四、女あり愛といふ詩歌併せ能す青楓
と號す富田氏に嫁して景周を生む

四十五 奥村 榮實 諱視院殿丹州刺史學摩道
活居士「中割一六八四」

榮實通稱助右衛門止齋と號す尙寬の子伊豫

守又丹後守に任ず和漢古今の書に博渉す嘗て藩校明倫堂の總奉行等に任ず寺島藏人、上田作之丞の二人前後革政を主張するに當り銳意之を壓して排斥す天保十四年八月歿す享年五十二

四十六 有澤 永貞

梧井庵實嚴永貞居士
〔中割一七五〇〕

永貞字は天淵通稱采右衛門高臥亭と號す幼より鉛韜を讀み兵事を語る佐々木秀乘、山鹿義目に從うて兵法を學ぶ事三十年其要訣を極め甲陽軍鑑本末通解を著す永貞の著書皆國字を以てす嘗て納戸奉行、細工奉行等たり正徳五年十一月歿す享年七十七其他著す所殘彙拾玉集、永貞遺訓抄、有澤私考、加陽御備定、大阪兩御陣日記等多し

四十七 有澤 武貞

桃水軒伯起武貞居士
〔中割一七五〇〕

武貞は永貞の長子なり字は伯起通稱森右衛門嘗て細工奉行等に任ず武貞桃水軒と號す其著に孫子講義、加陽領分次第、軍役今古通解等其他多し元文四年九月歿す

四十八 有澤 致貞

荆棘齋格之致貞居士
〔中割一七五〇〕

致貞は永貞の次子なり通稱總藏、箕裘を繼ぎ家聲を隕さす永貞の著書を注解し千慮一得、籌算術式等の著あり寶曆二年十二月歿す

四十九 有澤 貞幹

藍水堂伯固貞幹居士
〔中割一七五〇〕

貞幹は武貞の子字は伯固、通稱才右衛門藍水堂と號す才學あり善く父祖の遺學を唱へ其業に達す嘗て鉛奉行たり寶政二年五月歿す

五十九 里 步

正安院殿一蓮正念居士
〔中割一六四九〕

歩は藩士なり茶道宗和流第九世多賀宗衆の門に入り止小庵と號す後其家元を繼ぐ明治二十五年四月歿す

五十一 長谷川準左衛門

曙光院殿徹照
日行居士
〔中割一七二四〕

準左衛門諱は尙、字は子萃北固又鷄肋と號す中西尙賢に學び其高足たり尙賢歿し其門人皆準左衛門に從學す年四十餘藩老村井氏の家塾に教ゆ尋で藩主の侍講となり又藩校明倫堂の都講となる後能美郡代官に轉す文化九年六月歿す享年七十九

五十二 長谷川 猷

〔中割一七二四〕

猷は通稱源右衛門、準左衛門の子なり嘗て本多利明に就き洋學を修む嘗て大地球儀を作る又救荒新策を著し以て時務に資す蘭醫

黒川良安を祿し火術家齋藤三九郎を聘せしが如き皆猷の薦に依る嘗て南土藏奉行等たり嘉永二年 月歿す

五十三 長谷川準也

能持院殿是經日故居士
〔中割一七二四〕

準也は準左衛門の曾孫なり初の新番組を以て藩の軍務に鞅掌し權少佐に累進す明治六年金澤町總區長となる時に百事更改の後を承け舊藩士概ね業を失ふ乃ち職を辭し士族子女の爲に弟大塚志良と共に同志を募り金澤製糸會社を起し製絲業を始め又銅器會社燃絲會社を起し以て地方産業の爲に先啓の功を成す二十六年金澤市長に就職し後老を東京に養ふ四十年九月歿す享年六十六

五十四 脇田 直賢

玉峰如鐵居士

爲り放縱醜だ酒を嗜む酔うて詩を作ること頗る敏捷なり
初藩老前田氏に仕へ後村井氏に仕ふ

五十七 津田 孟昭 天心院殿前武衛月江道
國老居士 〔中割二二六〕

孟昭通稱芝華仙令と號し所居を嘉樂亭又温政齋と名づく
藩主綱紀の時家老に列し世子の博識なる老に及び職を解
き自ら義門と號す享保九年八月歿す享年七十四

五十八 今枝 近義 信齋一藤居士
〔中割二二七二〕

近義通稱民部宗門改奉行等を經て家老とな
り藩主綱紀の傳たり綱紀の徳器蚤く成るは
其輔養の功多しといふ學を好み常に喜で通
經綱目を讀み又源氏物語を好み小松梯天神
の僧能順の講説を聞く延寶三年致仕し同六
年十二月歿す

五十九 今枝 如永尼 如永了智大師
〔中割二二七二〕

繼ぎ尋で年寄席加判月番となり又土佐守に
任ず青地禮幹に私淑し屢々教を乞ふ時に大
槻内藏允國政を肆にす直躬世子宗辰の意を
受け之を除かん事を謀る藩主吉徳直躬の職
を脱ふ宗辰襲封して内藏允を斥く寛延元年
直躬藩主重熙の命を以て斷獄の案を作り内
藏允等を罪に處し事終に平ぐ直躬藩主吉徳
宗辰、重熙、重靖、治脩に歴事し輔翼の功
極めて多し安永三年四月歿す享年六十一

六十二 中村 萬右衛門 常忠院殿松樂即心傳道
居士〔中割四七八〕

萬右衛門は曾と稱す初名綱三郎實曆以來藩の大小將より
典小將頭、定番頭に累進し藩主重政の寵任殊に深し安永
九年二月八日途に金谷殿に於て高田善藏の爲に刺殺さる
時に年四十九

直賢通稱九兵衛實は朝鮮の翰林學士金時省
の子なり文祿の役年甫て七歳生擒せらる前
田利家の夫人親ら鞠育す長じて藩主利長に
事へ脇田氏の女を聚り其姓を冒す殘金奉行
小將頭等たり致仕して如鐵を號とす作文に
長じ聯歌を能くす又歌道を嗜み古今の秘訣
を一華堂乘阿如見より傳受す萬治三年七月
歿す享年七十五

五十五 脇田 直能 見翁玄樵居士

直能通稱九兵衛所居を颯雪亭といふ金澤町奉行等たり初
木下順庵に従學す詩作に長じ又聯歌を善くす而て茶道は
千宗室の門に白眉たり延寶四年三月歿す

五十六 中西 鯉溟

尚賢字は士希通稱市進鯉溟と號す本姓中原氏家貧にして
書を購ふを得ず乃ち常に市に閉して王充の跡に倣ふ人と

如永尼は今枝近義の叔母なり剃髮して如永尼と號す學を
好み詩才あり藩主綱紀其文名を聞き恒に奇書を貸す盜殊
過なりといふ元祿九年九月歿す

六十 今枝 直方 忠山石心居士
〔中割二二七二〕

直方通稱民部督て藩政を司る學を好み尤も
鈴稻の學と本藩の掌故に志し遂に新山田畔
書、温故雜錄、有初有終錄、御邦雜談等數
十部を編述し皆親ら國字を以て書し藩主の
行實、先世の格式、臣僚の事蹟、世風民俗
より財用物産の臚誦に至るまで備載す享保
十三年十一月歿す享年七十六といふ

六十一 前田 直躬 〔中割一七三五〕

直躬は初諱直寬幼名主稅九華と號す實に能
登侍從利政第四世の孫なり享保十四年家を

六十三 津田 淳二

養仙院清譽徳光
純照居士

〔中割一五七三〕

淳三本姓長尾氏出で、津田氏を繼ぐ家世藩老横山氏に仕ふ初大阪の緒方洪庵に從ひ洋醫學を修め後其塾頭となる學成りて歸る藩命に依りセバストボル戰記を譯して左右に上る尋で藩主の侍醫となる安政初年壯猶館に在て軍器取調に兼て蘭書を翻譯し諸生に教ゆ明治三年金澤醫學館教師となり八年石川縣立金澤病院主務醫となる著書に脉論あり明治十二年十月歿す享年五十六

六十四 大田 美農里

〔中割一五八七〕

美農里初名良策雪岳と號す父醫を以て藩老村井氏に仕ふ大阪緒方洪庵の門に入り終に

塾監となる尋で江戸手塚律藏に和蘭兵書を習ひ歸りて壯猶館蘭書翻譯兼會讀並醫學教師となる明治維新以後卯辰山養生所棟取、金澤醫學校長等となり金澤病院の新築に與り功多く又後進を薰陶す二十六年藍綬褒章を賜ふ明治四十二年十月歿す享年七十九

六十四 明石 春作

〔中割三六八〕

春作醫を以て藩老長氏に仕ふ昔て黒川其安に從ひ蘭學を修め後英學を修む壯猶館の歩兵操典は春作の翻譯に成るといふ

六十五 黒川 良安

〔芝山三三六〕

良安自然と號す富山藩士なり夙に長崎に往き蘭語を習ひ蘭法醫術を修む既にして諸國を周遊し信州松本に留り蘭書を佐久間象山に授く天保十一年加賀藩に仕へ侍醫となる

壯猶館の翻譯方となる安政中江戸に祇役す幕府良安に蕃書取調教授手傳を命ず尋で藩に歸り種痘所頭取、卯辰山養生所主附等となる明治二年藩に醫學館を設くるに及び其創設主任並に教師に任せらる廢藩の後致仕して閑地に在り居常子弟を教へ諄々として

倦まず明治二十三年九月歿す享年七十四

六十六 横山 政和

〔芝山三五〇〕

政和通稱藏人蘭洲と號す藩の老臣なり維新の後石川縣權大參事と爲る又白山比咩神社の宮司となり其故實を尋ねて廢を興し故書を整理す政和最も詩を能くし湖山、黄石等と親善なり明治二十六年八月歿す

六十七 横山 政禮

了縮院一葉文義居士
〔芝山三五〇〕

政禮字は子愷通稱多宮東嶽と號す藩の定火消役たり、書を讀み博聞多通能く古語を誦じて口誦す詩才あり著す所東華初稿あり天明三年正月歿す享年四十三

六十八 横山 政孝

仁敬院殿致堂長儀大居士
〔芝山三五〇〕

政孝字は誼夫通稱藏人、致堂と號す蓮湖長翁の別號あり定火消役を歴て家老となり晩に世子の傳と爲る居止度あり言ふ所必ず聖經に本づく又武技を能くし易學を好む詩作に長ず著す所致堂詩藁、詩律證、詩餘小譜あり天保七年正月歿す享年四十九

六十九 横山 桂

心謙院教華領妙容大姉
〔芝山三五〇〕

桂は致堂の前妻なり、字は依之蘭蝶と號す最も詩を善くす夫妻の詩を合刊して海棠園合刊といふ文化十二年正月歿す享年二十一

七十横山

榮 松貞院殿秀岩淨榮禪大師
〔芝山三五〇〕

榮は致堂の後妻なり名は榮蘭號と號す菴具の側に細帙を陳置し手に巻を釋かず問あれば則ち吟咏に耽り遂に詩八百三十餘首を賦す詩集あり文久三年十一月歿す享年五十九

七十一横山隆平

紹隆院殿平等全功
大居士
〔中割一六四八〕

隆平は通稱三左衛門藩老隆貴の子なり文久三年藩老となり尋で金澤城代、人持組頭となる四年藩主に代り上京して禁闕を守護し二條鷹司兩卿の邸を回勤す歸るに及び參内して褒詞を賜はる慶應三年京都に遊學し翌年歸り家祿奉還を乞ふ藩廳許さず後果して廢藩置縣の事あり衆其先明に服す夙に鑛業に志ざし明治十一年叔父隆興と相偕に尾小

屋鑛山を經營し爾來其業を擴む卅三年男爵を授けられ卅六年七月歿す享年五十九隆平常に公益に盡瘁し功績連に見はる又金澤能樂會、北陸繪畫協會を起し其會長となる

七十二横山隆興

慶雲院殿俊岳
隆興大居士
〔芝山三五〇〕

隆興は藩老隆章の三男なり初藩校明倫堂に學び明治の初大阪の儒者何禮之に就き並に開成學校に入り漢洋兩學併せ修む廢藩の後鑛業に志し尾小屋、平金其他の鑛山を經營し鉅富を致す平素公益に私財を投じ名望頗る隆し嘗て金澤商業會議所特別議員等となる趣味廣く殊に俳事を好み俳號を居中といふ大正五年四月歿す享年六十九

七十三長連弘

保合齋殿機先良轉大居士
〔芝山三三九〕

連弘通稱又三郎藩の人持組頭に班し執政たり從五位下に叙し大隅守に任ず才幹あり嘗て海岸防禦に施設する所多し最經濟の策に長じ諸局の宿弊を剷除す藩末財政の整備主として其功に賴る安政四年四月歿す享年四十三

七十四奥村永福

永福院殿朝散大夫豫州刺史快心宗活居士
〔中割一六八四〕

永福通稱助右衛門天正元年前田利家に仕ふ十二年能登末森城を固守し佐々成政の大軍を防ぐ從五位下に叙し伊豫守に任せらる慶長四年老して快心と號す大阪の役留りて金澤城を守る寛永元年六月歿す享年八十四

七十五奥村庸禮

庸禮 〔中割一六八四〕

庸禮字は師儉通稱壹岐豪富と號す藩主に從ひ江戸に在るの日明儒朱舜水に從ふて親ら敎示を受け國に在れば書簡を通じ疑義を質す而して師の敎を以て之を身に行ひ道義を以て自任す故に衆皆其德に服す著す所讀書拔尤錄あり貞享四年六月歿す享年六十一朱文公の家禮に倣ひて葬る

七十六堀昌安

昌安 〔後割乙二四九一〕

昌安は眼科醫養佐坊の子なり亦眼科を善す藩老前田氏に仕ふ恬澹施を好み言行奇矯なり嘗て千日町の盡頭に數十戸を作り窮氓をして住ましめ私に昌安町といふ町内に寺院を建て武術道場を設く晩年藩主前田氏高祿

を以て徴すと雖も應せず十人扶持を與ふ乃ち應ず文政十二年越前三國の客舎に歿す

七十七 加藤 里路〔後割乙一七四三〕

里路は修理又圖書と稱す加賀藩に仕ふ夙に狩谷竹柄の門に入り國學を修め和歌を能くす明治維新の後神祇官、教部省等に出仕し後石川縣を巡回して説教す之を縣下神道説教の嚆矢とす又各官國幣社宮司等に歴任す既にして金澤に閑居す所著に神風、椎廼舍集等あり明治四十四年二月歿す享年七十二

七十八 淺野屋佐平〔後割乙一七八九〕

佐平諱は茂枝、麻舎と號す夙に田中躬之に就き皇學を修め和歌に長ず常に勤王の説を唱へ福岡惣助等と親交あり文久元治の際に

澤町會所横目肝煎兼遞送方を以て京都に滞在し惣助等諸藩の同志と往復する書牘は佐平傳達して其志を助く元治甲子の變佐平亦京都に捕へられ永牢に處せらる慶應元年四月金澤の獄中に歿す年五十二後正五位を贈らる

七十九 水野 徳三郎〔後割乙一六九三〕

徳三郎諱は寛友藩士なり明治元年の夏土師越後を征討す藩亦旨を奉じ兵を出す徳三郎齋與兵衛に隸して發す會富山藩隊長故あり自及す徳三郎代りて其衆を總へ數處に轉戦し號命證明撫取方あり甚だ士心を得六月二十四日強兵に圍まれ軍中に戦死す享年三十八

八十 佐々木 泉景〔後割乙一四九四〕

泉景通稱熊次郎守繼といふ加賀大聖寺に生

る四歳能く書く長じて京都に適き鶴澤法眼探索其子法眼探泉に書を習ひ禁裏の繪御用を命せられ享和二年法橋に叙し國に歸る文政四年法眼に叙す醫師格を以て藩主前田氏に仕へ繪事を勤む泉景又和歌連歌を好み暇あれば則ち吟咏に耽る嘉永元年九月歿す享年七十六墓誌は貫名海屋の撰書に係る

八十一 佐々木 泉 玄〔後割乙一四九四〕

守公院殿法眼泉玄〔後割乙一四九四〕
泉玄は守公と稱す初春鳴と號す書を以て藩主前田氏に事ふ天保五年法橋に叙し嘉永五年法眼に叙す泉玄又點茶插花の技に精し和歌連歌を能くし善く人と交はる明治十二年六月歿す享年七十五

八十二 佐々木 泉 龍〔後割乙一九一九〕

白嶽院法眼泉龍〔後割乙一九一九〕
居

泉龍は泉景の次子なり幼時書を學ぶ成らす父兄の爲に疎せらる乃ち奮然志を立て京都に往き鶴澤法眼探泉の門に入り専心書道を研究し諸州を遍歴し遂に上達して一家を成し法眼に叙す明治十七年六月歿す享年七十

八十三 佐々木 泉 山〔後割乙一四九四〕

直道院殿釋泉山居士〔後割乙一四九四〕
泉山は泉玄の嫡男あり守直と稱す藩主前田氏の繪御用を勤む明治十九年十月歿す享年五十三

八十四 長沖屋五郎兵衛〔後割甲一三五三〕

五郎兵衛は加賀大聖寺の人京都に居て製箔の業を習ふ後金澤に來住し初めて金箔を打つ是より金箔の製造行はるゝに至る弘化四年十二月歿す享年五十六

八十五 安達 幸之助

〔後割乙八二七〕

幸之助諱は寛栗、安政三年江戸の藩邸に祇役し西洋學を村田藏六の門に學び遂に塾頭となる藏六は後に大村益次郎いふ幸之助幕府に聘せられ西洋兵學を講武所に講説す翌年藩に歸り徒士に擢られ壯猶館教授となり又大砲鑄造の事に從ふ會々京都に出て舊師益次郎に邂逅し軍務官に薦められ伏見兵學校に兵學を講ず二年九月賊數人益次郎を京都の旅舎に襲撃す幸之助會々在り賊と戦ひ創つきて倒る年四十六官購を賜ひて葬らしむ大正四年正五位を贈らる

八十六 青地 禮幹

〔後割乙一五四八〕

禮幹諱は貞淑通稱藤太夫凌新と號し所居を

仁知樓といふ藩に重用せられて大小將頭に至る生平學を好み室鳩巢に親炙し經史に通じ詩文を能くす可觀小説、凌新秘策、加邦錄等其他所著多し大槻内藏助の非行を見慷慨禁せず書を國老本多安房守に送り其奸を發くべきを告げ又書を世子宗辰に上り内藏助の罪狀を彈劾す延享元年四月歿す享年七十八

八十七 青地 齊賢

〔後割乙一五四八〕

齊賢字は伯孜通稱藏人讓水又兼山と號し亭を愛日と號す藩の定番頭たり室鳩巢に従學す所謂室門七弟の一なり著す所兼山麗澤秘策あり享保十三年十二月歿す享年五十七

八十八 矢田 四如軒

〔後割乙一三二一五〕

四如軒諱は廣貫通稱六郎兵衛藩老前田氏に

仕ふ書を能くし最も人物を描くに長ず傳に云ふ岸駒少時四如軒に就き書を習ふと寛政

六年五月歿す享年七十七

八十九 津田 隨分齋

〔後割乙一〇六七〕

隨分齋は淳三の養父なり醫を以て藩老横山氏に仕ふ嘗て黒川良安に就き蘭書に依りて天文會密等の學を修む

九十大地 昌立

〔後割乙一三〇三〕

昌立字は士俞又行甫通稱新八郎、東川、遜軒、慈齋、奚疑皆其號なり室鳩巢の外甥なり幼より文を屬し詩を作る又漢學に通ず嘗て藩主の侍讀となる恩遇殊に厚し寶曆二年四月歿す享年六十三門人所輯の奚疑遺稿あり

九十一 大地 文寶

〔後割乙一三〇三〕

文寶字は伯政通稱縫殿左衛門源齊又拙靜と號す家學を守

り詩書曲に耽る嘗て江戸に在るの日寛齋、詩佛、五山等と詩書之交を爲す文政十年十二月歿す

九十二 楠部 芸臺

〔後割乙一三二一〕

芸臺名は肇、字は子春、通稱金五郎芸臺は其號なり三歳能く字を作り歐法を學び終に能書の名あり殊に壁窠大書を善くす藩主召して八大字を作るを觀る縦筆揮灑墨瀟飛んで近侍の衣を汚す藩主激賞して善と稱す文政三年九月歿す享年六十一墓誌は實に頼山陽の撰書に係る

九十三 宅 恒

〔後割乙一五四四〕

恒立軒と號す年長じて江戸に遊び古賀侗庵の門に入り旁ら醫學を講ず頼三樹等と友たり歸りて醫を始む治を施すに漢洋を折衷す明治の初西京に在り國事に執筆す後藩の文

學訓導たり晩年詩文を以て自ら娛む明治二十年十月歿す享年六十二

九十四 新井白蛾

白蛾字は謙吉黃洲又龍山と號す江戸に生る荻生茂卿等に師事し京阪の間に在り易經を生徒に授く寛政中藩に聘せられ來りて藩校明倫堂の學頭となり藩主の侍讀を兼ね獻議する所多し輿望大に揚り國卿大夫皆就て師とす寛政四年五月歿す墓は馬鬣封にして碑銘等なし著すところ論語彙解、古易斷、唐詩兒解、古易時言等あり

九十五 高田方水

方水通稱彌平次、書法を井出正水に學び和田淡水、赤井得水と名を齊くし正水門下の

三水と稱す寛政五年五月歿す享年八十二

九十六 武藤濃之助

濃之助諱は元良以成堂と號す藩の馬廻組たり幼より武技を好み八島金藏の門に入り其奥秘を極む藩主屢々内殿に召す又經武館に武藝を講じ師範人の爲に補助す安政四年十二月歿す享年七十

九十七 武藤元信

元信裕軒と號し所居を何故樓といふ藩士武藤濃之助の子なり和漢の典籍に涉獵し旁ら百科の學に通曉し語家の門に出入し知見極めて汎し而も和漢の文を能くし筆を援ると敏捷なり屢々東洋學藝雜誌を藉り其研究したる所を發表して學界に貢獻す又嘗て枕草

紙考異、枕草紙通釋を著し學者をして推稱措かざらしむ重野安釋、中村正直、本居豐穎、井上頼園、物集高見、三嶋毅等の如き戚友とし交はる其他著す所枕草紙別記、昔のおもかげ、鸚鵡の聲音等あり其畢生の業として力を用ゆる所のもの別に在るあり其稿未だ成るに及ばず大正七年十二月歿す享年六十五元信幼にして文武の業を習ひ稍長し豊嶋毅に従遊す嘗て師範學校教諭、第四高等學校教務囑托等たり一旦辭してより榮職に厚聘さるゝと雖復就かず

九十八 永山平太

平太諱は平、字は政勝、亥軒、椿園皆其號なり少時西坂成庵等に學び後江戸に抵り安

積良齋に師事し佐久間象山等と友とし善し歸りて徒に授く尋で藩校明倫堂の講官となる文久中藩主齊泰京師に朝覲し亥軒此に従ふ屢朝紳に謁し尊攘の説に就て其志を言ふ會々讒せられ藩に歸り讒を獲て錮せらる慶應の初貢士に選まれ集議院に待詔し献替する所多し免されて歸り權少屬文學教師となる明治十二年八月歿す享年六十五著す所椿園詩鈔、亥軒文抄、填移小議等あり

九十九 成瀬正居

正居通稱主稅夙に歌學及國典を田中躬之に學ぶ嘗て金澤藩權少參事、石川縣出仕、白山比咩神社禰宜等に歷任す所著に言靈傳、歌題四季部類等あり明治三十五年十月歿す

百 嶋 林 甫 立 釋了秋「後割乙三四」

甫立は通稱一平父の觀月庵太甫は風交甚だ
汎し行脚の輩常に来り一宿を乞ふ太甫時に
明を失し甫立傍に侍して代筆す之を以て蘊
蓄する所甚深し立介の後を繼席し暮柳舎と
號す明治四十一年五月歿す享年六十七

百一 岡田 信之「後割乙六二」

信之諱は之靜字は信民靜山と號す勤儉にし
て至孝伊藤幸野に従うて經義を討論し性情
を吟咏す嘗て藩の定番頭並と爲る遺稿を靜
山集といふ明治四年二月歿す享年六十六

百二 城戸屋六兵衛法蓮社釋導心
「後割乙三七四」

六兵衛は河南町に吳服古物を商ふ嘗て本町
肝煎となる仁心頗る厚く居常放生を行ふ國

ひ來り活版印刷業を創む事は明治五六年の
交に在り蓋し地方印刷業の嚆矢なり大正元
年十一月歿す享年七十四

百四 大橋 卓丈

卓丈は初石橋和俊といふ俳事を嗜む京都に在りて櫻井梅
室の門に遊び伊勢の人十丈の後を繼ぎ十丈園といひ別號
を雨庵、蘆花、半輪庵といふ後金澤に歸る卓丈又香を能く
筆力雄勁好く大字を作る文久元年十月歿す享年五十四

百五 三箇屋五郎兵衛「後割乙四三八」

三箇屋本姓木下氏三世五郎兵衛は慶安四年
金澤家柄町人に算へられ町年寄を勤む五世
に至り始めて書林を營み書車堂と號す之を
金澤書買の始祖とす元祿より正徳に至る間
に於て三用集、六用集等を首め歌書習字本
年代記等に屬するもの二十種許を出版し以

制老馬を江州に送り生革を剃ぎ以て公用に
備ふ六兵衛之を感み屋舎を川上に建て此に
老牛馬を收養す又味噌蔵を建て毎歳味噌五
千貫目宛を造り不時の軍用に備ふ又貯金を
藩主に呈し以て國恩を報すと爲す文久二年
八月歿す享年六十九

百三 小嶋 致將釋願心
「後割甲八九五」

致將は初宗將といふ通稱爲三郎具足師小嶋
宗直の甥なり入りて其職を襲ぐ藩末掉尾の
良工にして鋸起の紋理整正なる鐵質の堅緻
滋潤なる一種精妙の技あり彼の大聖寺山田
長三郎等は皆其門に出づ廢藩の後活字の鑄
造を工夫し其成るに及んで大屋凱飲の長崎
に往くに同道し彼地にて洋紙インキ等を購

て普通知識の啓發を資くること少からず

百六 岡野 四郎鐵後院行樂政一居士
「舊幕地」

四郎は初外龜四郎と稱す藩士岡野政釋の第
四子なり元治甲子の事に坐し父子共に罪を
獲て禁錮せらる明治元年四郎赦に遭ひ尋で
金澤縣大屬に任じ更に石川縣大屬となり又
司法省に出仕す八年十月歿す享年三十三

百六 御園 如淵「後割乙七九〇」

如淵名は爲一通稱和左衛門藩士なり常に國事を憂ひ世務
に志す又兵符を好み數學を善くし旁ら詩歌を賦す明治八
年十二月歿す享年六十九

百七 御園 紹元「後割乙七九〇」

紹元は初瀬尾氏餘一と稱す如淵の嫡男なり
慷慨にして學を勉む元治元年國事に坐し家

に銅せられ慶應三年四月歿す享年三十二

百八戸水 侗齋 好學院醫念
後製乙二四三一

侗齋諱は弘字は元毅通稱喜四郎別號を北湖といふ金澤町奉行松尾氏に任べ其家事を掌り傍ら中嶋石浦に就き學を修む後致仕して家塾を開き子弟に教え自ら町儒者を以て任す侗齋母に事へて至孝年五十に及ぶと雖娶らず自ら薪水の勞に服す藩主賞して銀十枚を賜ふ天保三年藩老本多氏の侍講となる越えて五年六月歿す享年七十五

百九 小松屋 蘭洲 妙法宗言信士
「上野七三」

蘭洲本姓を秦といふ名は致字は叔翁通稱兵右衛門製刷を業とす最も書を好み晋唐宋元窺はざる所なく李北海を以て宗とす其書を作るや専ら神意を會するを勉め之を以て

子弟に誨ふ常に酒を嗜み醉へば則ち書す又詩歌を作るも雖も傳ふる者至少なり明治四年八月歿す享年五十三

百十九里 正長 法身院殿一蓮正長居士
「中割一六四九」

正長字は仲天通稱覺右衛門藩の馬廻頭たり貞享四年致仕して夕庵と號し又三三里人と號す嘗て五代積年記を編撰し國史の大綱を撮りて和漢並へ掲ぐ藩主綱紀覽て之を賞す元祿七年五月歿す

百十一 瀬尾 健造 釋舍藏
「新嘉地」

健造は加賀鶴來の人字は子彊劍北と號す年少くして金澤に來り經史を究め文章を練り井口濟、野口之布等と親交を締る會々郷人小川幸三勤王之志厚し健造之と意氣投合し共に國事に盡瘁せんことを約す元治甲子の變藩内の志士皆嚴刑に處せられ幸三亦斬らる健造纔に連坐を免ると雖藩吏の監視甚嚴

なり親戚朋友之を危み勸めて其志を改めしむ健造固執して動かす維新の後官に仕へ後師範學校等に教鞭を執る明治三十七年三月歿す享年六十六

百十二 松原 匠作 成就院釋樂居士
「新嘉地甲八二」

匠作初名信兵衛藩士なり幼より文武の業を習ひ和算を瀧川秀藏に學び輿儀を究む又弟の關口開等と共に本多利明の著譯書に頼り洋算を研究し兼て天文航海の學に通ず匠作經理の材あり依て會計の庶職に歷任し維新の後石川縣富山支廳長となる尋で職を罷め民業に従事す明治四十二年十一月歿す

百十三 關 口 開 開校院勸學館道居士
「新嘉地甲八二」

開初名甚之丞幼より文學武藝を修め瀧川秀

藏に和算を習ひ秘蘊を究め戸倉伊八郎に洋算を習ひ又本多利明著譯の書に就き西洋數學の源委を推究し尋で岩田某に就き洋書を習ひ英和辭書等に依り遂に西洋の算書を解釋す後衍象舎を起し其舎長となり數學を諸生に教ゆ常に著書翻譯に従事し數學問題集、新撰數學、點竄問題集、代數學、算法究理問答等皆刊行し殊に新撰數學は全國に普及し重版六たびに至る又微積分學等未刊のもの十數部あり瀧川派和算には球圓五十問答の著あり嘗て職を石川縣師範學校、石川縣專門學校等に奉す一時石川縣に數學の進歩したるは實に開の力なり明治十七年四月歿す享年四十三後從五位を贈らる

百十四 内海 吉造「新墓地甲七八三」

吉造の家もと鍋屋といふ幼時佐々木泉龍に書を習ひ松齡堂陶山と號す慶應の末金澤陶器商相合して問屋を起し赤繪職を羅し職業を研究するに當り吉造其棟取に推撰せらる尋で阿部碧梅の爲に其製陶場の工長となり陶器の素質形状及書風を改良し九谷陶窯に工夫を施し口徑三尺五寸の錦窯を築造し始めて大形の陶器を製造す爾來皆之に倣ふ又九谷燒の繪付法を改良し金泥の斑點を再燒するの方法を發明す又嘗て爲絢社を起して陶畫工を糾合し其社長に推さる明治十八年十一月歿す

百十五 高林 景寬「新墓地」

景寬字は千栗初久津見宣といふ歌道を田中躬之に習ひ國

學に通じ和歌を能くす明治十四年歿す享年七十四

百十六 田中正義「靈鷲院魯齋正義居士新墓地一三六」

正義年少井口濟に漢學を三角風藏に算術を習ひ四十歳初めて鹿田文平に洋書を習ふ後江戸に往き佐倉藩士外國事務係手塚律藏に従學す慶應中壯猶館に在りて砲術を教授し維新の後金澤藩權少屬等に歴任す明治十三年地誌編纂に従事し二十五年石川縣租稅史を編纂し二十八年二月歿す享年八十正義の壯猶館に在るや當時洋學者頗る稀なり然るに英和字書を著し西洋學の輸入に努力す故を以て安達幸之助等と親交あり

百十七 井口嘉一郎「新墓地乙一三二〇」

嘉一郎名は濟字は孟篤犀川又孜孜堂と號す

少より學を好む江戸に往き諸名家に踵り乞

ひて自ら春汲を執り以て業を受く安井息軒、塩谷岩陰等皆門下に居らしむ業大に進む濱松藩の藩學教官に聘せらる罷めて郷に歸り徒に授け又藩老横山氏の儒員となる明治二年藩の貢士となり既にして徴士となり權辨事となる廢藩の後石川縣専門學校教諭兼師範學校教諭となる明治十七年五月歿す享年七十三

百十八 井口無加之「新墓地乙一三二〇」

無加之は嘉一郎の嫡男なり柿園と號す漢學に長じ識見甚だ高し又能く文を作る嘗て石川新聞等の主筆記者となる最も多く漢文を以て論説を草す行文流暢意義詳明而も筆を

下すこと敏捷なり明治十四年十月歿す

百十九 小川 政成「新墓地乙八六五」

政成一名燧字は子成南晴と號す初通稱を政成といふ經史を習ひ旁ら醫學を修む藩校明倫堂に醫學を講ず尋で卯辰山養生所棟取となり又緒方惟準の門に遊び熟識なる明治八年郷に歸り醫を業とす嘗て兼六公園誌を著す明治四十一年五月歿す

百二十 狩谷 竹輅「新墓地乙五二六」

竹輅又鷹友の字を用ふ通稱金吾其居を神習館といふ田中躬之に國學を習ひ高足の稱あり藩校明倫堂に國學を講ず嘉永中外船屢來る竹輅之を慨し駁蘭長賦を詠じ其志を述ぶ嘗て藩命に由り類聚國史補を撰す所著に駁戎類制、之許乃御楯等數十種あり明治十一年六月歿す享年五十七

百廿一 中濱 鶴汀

靜光院釋願齋居士
「新嘉地丙二〇三十一」

鶴汀は醫中濱松齋の子なり幼より書を好む松齋往て京都に醫を學ばしむ到れば則ち知名の書家を訪ひ専ら南北合法を窺ひ自ら一家を成し歸りて書師となる嘗て竹澤殿の襖に繪く爾來藩主の殊遇を受く明治三年九月歿す享年七十八

百廿二 中濱 龍淵

長樂院龍淵釋曉
時居士

龍淵は鶴汀の嫡男なり字は子成通稱主膳別號を孤峰又長樂といふ幼より書を習ひ稍長じて京師に往き山本梅逸等に師事し名流と往來し最も海僊と相善し常に出遊を喜み暇茗園棋漢詩を賦し俳句を作る皆其緒餘なり門人多し嘗て全國繪畫品評會審査員となる

明治三十年六月歿す享年七十一

百廿三 中濱 龍山

榮國院釋誠貞居士

龍山名は榮字は誠貞別號を北淵といふ鶴汀の次男なり鶴汀龍山をして醫たらしめんと欲し吉益北洲に従事せしむ樂成ると雖も醫を好まず遂に古代の粉本を摹して専ら書を習ひ四方に遊歴す慶應元年五月歿す

百廿四 山 岸

廣德院英男日弘居士
「新嘉地甲二〇一」

弘は幼名半陸北洲と號す夙に文武を兼修す嘗て藩校明倫堂助教等となり世子利嗣の侍讀を兼ね維新の後金澤區會議長に擧げられ又金澤學校の主座教師たり明治三十七年三月歿す享年七十一

百廿五 萩原 八兵衛

春山院覺徹日間居士
「中割一八五三」

八兵衛初名又六字は季昌家世前田氏に仕へ組打の師範人として聲名藩中に播す嘗て物

頭並に歷進す文政八年正月歿す

百廿六 米田 孫六

「新嘉地甲二一〇」

孫六技を蒔繪師吉右衛門に學び其蘊奥を極め殊に寫生に巧なり天保弘化の間に於て斯界に良工の名を博す其子孫六南溪と號し業を繼ぎ技も亦巧なり

百廿七 吉本次郎兵衛

法持院實相日
明僧士
「新嘉地甲二二七三」

次郎兵衛汝蒼と號す其家もと仕出料理を業とす喜んで算算漢籍亂舞を學び初裁縫を業とし後書林を兼營す夙に人智啓發が新聞紙に負ふ所多きを察し明治四年開化新聞を發刊し編輯印刷皆概ね自ら發刊の古きこと全國を通じ第五位に居る後石川新聞と改題し爲に北濱社を組織して其社長となる實に

金澤に於る最初の新聞經營者なり明治二十五年八月歿す享年六十二

百廿八 北山 重正

「新嘉地六八」

重正は伊勢の人夙に國學を修め和歌を能くす神宮教院に勤務し後神宮奉齋會金澤本部長等となる遂に權大教正に進む重正金澤に在るの日北陸人類學會、北陸史談會の創設に與り其功最多し大正三年七月歿す享年五十六

百廿九 能本 和彦

「新嘉地甲六二九」

和彦幼より國語及び神典を修め又和歌を善くす從遊する者頗る多し嘗て金澤女學校に教鞭を執る明治二十六年十一月歿す享年五十六

百三十 中 村 順二郎

慎了院榮高心華居士
「新嘉地一三三六」

順二郎は初順之助と稱す榮高と號す心華、慎了皆別號な

り書物出納方等の贈職を歴て藩校明倫堂助教となり藩主
利朝に漢籍を教ゆ晩年佛門に入る明治十五年七月歿す

百卅一 直野 碧玲瓏 開神院釋玲瓏

碧玲瓏通稱了之晋日本派の俳人なり北陸新報、國民新聞に記者たり後北國新聞の編輯に従事し俳事を鼓吹す明治三十八年六月歿す年三十八

百卅二 太田 篤敬 廣開院釋聖正居士

篤敬は舊藩士なり夙に機械工業に志す年十九藩の兵器製造所の洋式砲銃製造教授たり明治七年金澤製絲場成るや製絲機械の鐵工部を擔任し地方の鐵工を指揮し汽鐘及汽器を据付く之を北陸地方蒸汽工業の嚆矢とす越えて九年自宅に工場を設く實に北陸にありて機械製造工場の嚆矢なり而て其發明

の各種製絲用機械を製造し之を加能越三州に普及す大正四年九月歿す享年七十七

百卅三 津田 米次郎 釋瑞暉

米次郎夙に機械の發明に苦心し大阪の住友製絲場に往き從業中途に力織機を發明し歸りて水登、大塚等の後援に賴りて成功し之を津田式力織機と稱ふ日本の織機として國中連りに之を使用するに至る大正五年十一月歿す享年五十四

百卅四 水登 勇太郎 芝山四六六

勇太郎夙に産業の興起に志し率先して牧畜業を始め手巾を創製し津田米次郎を翼けて津田式力織機を成功せしめ自家の工場に使用して其用ゆべきを衆に觀す嘗て衆議院議

員に當選し金澤商業會議所會頭に就任し又私立英和學校に校長となり私立北陸女學校創立者の一人に加はる大正六年十月歿す享年六十六

百卅五 毛 受 莊助 靈隱院釋現好禪定門

莊助は藩の執政長氏の家臣なり弘化中藩儒に召出され藩校明倫堂に助教たり又藩主前田氏世子慶寧の侍講を勤む安政四年五月歿す

百卅六 宮 北 直方 即心院釋直方居士

直方は藩士なり死矣と號す又北山、霞松、花隄、履善等の別號あり漢籍に精通し藩立濟々館等に漢學を講じ後普通教育に従事す又詩文を能くし和歌俳諧書道を嗜む終生莊

子と碧巖錄を讀み追慕錄を著す多く奇行を傳ふ明治二十二年三月歿す享年五十八

百卅七 竹橋 尙文 新基地乙一〇六

尙文幼名九十郎世々藩老横山氏に仕ふ髫髻の頃枯侍を喪ひ叔父に養はる藩儒野口犀陽に従學す明治三年大阪兵學寮に入り業を修め明年陸軍少尉となり累進して中將に至り東京砲兵學校提理、由良要塞司令官等に任ぜらる明治三十九年五月歿す享年五十六

百卅八 宮 嶋 常次郎 釋常信

常次郎は佛師なり又畫を佐々木泉龍に學ぶ尤浮世繪を描くに巧にして畫名を恒信といふ多年北國新聞の挿繪を描く大正五年九月歿す

百卅九 津田 正隣〔中割二二六〕

政隣は初權平と稱し後左近衛門と改む藩主前田重敏、治脩、齊廣に歴仕し大小將頭に歴進す讀書を喜み略文學あり嘗て藩政の初以來の諸家の記録を通覽し其天文より安永に至る二百四十年間の事を録し政隣記と稱し又安永より文化に至る三十六年間自ら見聞する所を録し耳目甄録と號し公官臣僚の事蹟粗見はる文化十一年某月歿す享年五十九

百四十 金子 清作

清休院隱居

清作は藩士なり夙に意を經濟に用ひ土籍を去り嘉永中加越能三州海岸の堤防及び不毛の地を拓き植樹を植え又尤も蠶絲業を興す

て復起つ能はず其日遂に歿す事は大正八年四月に在り享年五十六

百四十二 村上 九郎作

〔新嘉地二二六七〕

九郎作は加賀小松に生る鐵堂又古今亭と號す夙に古彫刻を研究す嘗て内外の博覽會に彫刻物を出品し毎ねに優賞を得明治二十三年以來石川縣工業學校教諭、富山縣工藝學校校長兼教諭等に歴任し後辭して山中商會の聘に應じ米國に渡航し歸朝して同商會工場長に就職す同商會が米國の世界大博覽會に出品したる日光式建築物並其内部裝飾の設計考案は九郎作の製作に係る既にして郷に還り舊門弟を集め海外輸出品を製作す大正八年五月歿す享年五十二

に志し山野を跋渉して良桑を發見すれば之を接培して四方に頒ち尙其分接法を衆に授く人之を金子桑と唱ふ又嘗て製絲座繰機械を發明し其製作を獎勵して以て人力を省き需用を減せしむ而て之が爲に資産を蕩盡し嘗て悔ゆる色なし依て明治二十七年官藍綬褒章を賜ひ其善行を表彰す二十九年四月歿す享年八十二

百四十一 佐野 吉之助

〔墓石未誌〕

吉之助幼時能樂を諸橋權之進に習ひ謠曲を石橋和平に習ひ後年寶生九郎の門に入り研鑽怠らず遂に北陸に於る斯界の耆宿となり又金澤能樂會の爲に常に努力す或日能樂會に松風のシテを勤め最後の留踏に遽に倒れ

百四十三 篠原 讓吉

〔馬城院殿眞山後光居士中割一七三〇〕

讓吉は前に陸軍二等主計たり國民黨に籍して地方政界に立ち縣會及市會に議員となり又商業會議所議員に擧げらる讓吉常軒と號す口辯に雄に詩作を好む大正八年五月歿す享年四十四

百四十四 千田 白行

〔後刻〕

白行は大工絹屋三郎右衛門の次子なり初吉右衛門といふ父の業を習ひ夙成の名あり又建築製圖及彫刻の技に長じ屢應二年藩主前田氏の大工に擢用せられ作事所總肝煎たり門下又衆く名匠を出す白行好んで浮波を彫刻す其世に稱せらるゝもの多し晩年歌道に志し身を終ふ時に明治二十四年二月享年七

百四十五 薄井 梅下 釋悟庵正道居士

梅下は濤の足輕なり俳事を嗜み初春月庵といひ後北洲の後を繼席し梅雲庵二世と稱す明治二十七年九月歿す

百四十六 賀古 文架 「後朝乙二六六〇」

文架舊藩に仕ふ文器門下の俳人なり後柿丸舎六世を繼席す明治二十七年十月歿す享年五十五

百四十七 橘 太甫 釋觀月

太甫通稱雨次郎所居を觀月庵といふ金澤町會所に吏たり俳事を喜み風交汎し安政六年六月歿す享年七十四

百四十八 塚田 一景 「中朝一六三」

一景通稱源次郎藩士なり初俳號を意苗といひ後一景に改む嘗て戊辰の役に従ひ軍中吟咏を絶たず古來の後を繼ぎ歳曉庵といふ明治三十二年七月歿す享年七十五

百四十九 中野 十逸 十逸院釋民榮居士

十逸通稱民榮俳事を能くし所居を青雲庵といふ明治四十

三年二月歿す享年七十七

百五十 清金屋 樂乎

樂乎は俳人なり眉山の門に出づ白鷗齋を繼席し琴で樂歴四世を稱す

百五十一 篠田 梅湫 「眞正院釋梅湫居士
新嘉地丙二」

梅湫名は一勝藩老前田氏の家臣なり俳事に長じ暎月庵と稱す大正七年十月歿す享年八十四

大乘寺

一月舟宗悋

月舟は本寺第二十六世の住僧なり隱元歸化して蕤風盛に行はれ曹洞の諸刹禪林を紊る者頗る多き時に當り月舟獨臂を掲げ古今を折衷して禪規の風を拯ふ禪餘又詩を嗜む實に本寺中興の功あり元祿九年正月寂す

二 卍山道白

卍山は金澤の人業を月舟に受け詩名一時に翹翹たり世に詩萬山と呼ぶ嘗て攝津興禪寺、山城禪定寺に住し又本寺に住して二十七世たり本寺復興の功少からず著す所萬山和尚廣錄、洞門衣衲集、禪餘套稿等あり正

德五年八月寂す

三 本多 政敏 德昌院殿天淵道機大居士

政敏は初政在と稱す字は澹靜通稱主殿藩主前田氏に仕ふ元祿十四年家督を相續し人持組頭、家老に歴任し翌年安房守に任ず政敏鶴夢と號す別號を天淵又臥偃といひ所居を仙遊臺と名づく儒學に精通し禪に該通し室鳩巢等と親交あり又月舟、卍山、月坡等と方外の交をなす又臨池の技に富み尤行草に妙なり正德五年三月歿す享年六十三

四 本多 圖書 鍾岳院殿秀山道逸居士

圖書諱は政冬字は仲貞初長五郎といふ政敏の弟なり若年寄を経て家老となる圖書尤も詩賦を好み文峰又龜居子と號し所居を藏六窩といふ享保十三年五月歿す享年六十九

五 本多政均

大雄院殿義藤 忠大居士

政均は幼名右近後主殿と改む家世藩老の首班たり安政三年家を継ぎ播磨守に任せらる文久三年藩命を以て京都に上り天機を候す朝旨政均をして留りて替下を守衛せしむ慶應三年世子慶寧に代り参朝して大政奉還等の垂問に應ふ明治元年藩主齊泰に扈して入京し参朝天機を拜す政均夙に名分を辨識し齊泰慶寧が皇室を仰尊するの志を翼く慶寧の封を襲ぐに及び多く藩章を釐革し政均主として其議に與かる守舊の徒之を憚はず二年八月藩士山邊井口の二人政均を藩廳の廊廡に要し之を刺殺す政均時に年三十二後從四位を贈らる

四〇

六

本多	政得	定昭院後月政得居士
西村	貞勝	顯勇院忠誠賢居士
矢野	察倫	忠顯院一又真篤居士
鍋木	氏忠	善行院釋氏忠居士
富田	勝愛	武儀院忠賢貫道居士
舟喜	篤好	
淺井	好近	忠謙院爲了義繼居士
吉見	爲得	顯忠院釋慶庵
芝木	定經	忠達院法印日誠居士
廣田	直久	忠開院釋顯得直道居士
湯口	一重	顯顯院誠忠釋一重信士
藤江	高虎	至成院釋了尊居士

政得等十二人皆藩の執政本多政均の故臣なり政均藩政を改革し物議を招き遂に反對黨の爲に稱刺せらる而して其黨與の中尉せられざる者あり政得等之を仇として報復し各罪に服す事は明治五年十一月に在り時人之を義とし十二義士と稱す

七 本多周居六

周居六傲翁道英老居士

周居六は藩士なり臨池の技を能くし又俳事に長じ居六といふ明治二十九年七月歿す享年八十

八 林慶助

慶助名は翼字は巢生柏堂と號す藩老今枝氏に仕ふ寛政中藩校明倫堂の新に成るに當り助教となり尋で藩儒となる慶助尤能く春秋左氏傳を講ず又書は小楷に長す寛政九年五月歿す享年五十四

九 林周輔

周輔は澁谷潜藏の次子なり出で、林慶助の養嗣子となる瑜と稱し菰坂と號す寛政九年家督を継ぎ藩儒となる文化四年藩校明倫堂助教となり藩主の侍讀を兼ね嘗て悟窓詩話

を著す又能く書を描く天保七年八月歿す享年五十六

十 大嶋維直

直密院德行日從居士

維直字は無算贊川と號す往て昌平巒に學び業大に進む歸りて藩校明倫堂助教となり尋で新番組に班す後大小將に進む操行端嚴常に藩主の爲に經史を講ず献替する所多し又歴代の制度沿革に考覈を加ふ天保九年四月歿す享年七十七

十一 大嶋清太

清光院義忠日從居士

清太字は景實桃年と號す維直の男なり最も文才あり昌平巒に學び大槻磐溪と友善なり歸りて明倫堂助教を以て藩主の侍讀を兼ね藩に二十一史校刻の事あり清太其總裁たり

嘗て史記考異を著し又欽定四經等の校刻に與る嘉永六年八月歿す享年六十

十二 大島 善太郎

善太郎諱は善字は伯遷拓軒と號す七原、稼亭の別號あり清太の子なり嘗て藩校明倫堂助教を以て藩主齊泰及世子慶寧の侍講を兼ね後教授加人に進む廢藩の後東京に往き前田氏の家乗編修の事に與かる明治十三年二月歿す享年五十四

十三 加藤 九八郎

九八郎は藩の人持組菊池氏の家臣なり夙に天文曆數火術の學を究め後黒川良安に就て蘭學を修め遠藤數馬の薦に依て藩主齊廣に仕ふ嘉永中火術方雇、壯猶館製藥方、測量

方、鑄造方等に歷職し砲術師範となり更に天文方に轉す安政六年八月歿す

十四 高田 善藏 衛漢院義塾立節居士

善藏は藩主治脩の近臣なり時に定番組頭並中村萬右衛門大に重敷の寵任を恃み僭妄自恣なり善藏之を視て或は其害の小にして熄まざるを慮り安永九年二月八日萬右衛門を金谷殿の千鳥の廊下に刺殺し十五日命を以て屠腹す時に年二十三

十五 野村 圓平 釋淨芳

圓平通稱次右衛門空翠又栖霞と號す所居を空翠樓又協幽齋といひ家を八田屋と號す藩士數十家の日傭頭を業とす空翠國書漢籍を涉獵し書畫を能くし漢詩に長す師友に詩

佛、山陽、五山、米庵、文晁、小竹、春翠、淡窓等京阪の名流多し殊に日野亞相の知遇を被る空翠私に時事を慨し安政五年空翠雜話を著し我國體の精華を説き宣長、篤胤の未だ説かざる所を道破し版刻に附す遂に俗儒の忌諱を招き羅織せられて版木沒收の厄に逢ふ元治元年十二月歿す享年八十二墓誌は大窪詩佛の撰書に係る

十六 佐久間 寬臺 寬昌院寄寓長居居士

寬臺通稱五郎八東岳と號す藩士なり書を讀み歌を作る嘗て定番馬廻、鐵砲玉藥奉行、作事奉行、書物奉行兼書寫奉行等に歷任す當時藩内に謠曲盛行はると雖其意義を解する者なし寬臺之を憾み獨り自ら之が注釋を

試み文化六年内篇先づ成り九年外篇復成る之を謠言粗志と題す藩主其書を覽て一本を寫して上らしむ尙所著に猫鼠軍談等數種あり文政元年十一月歿す享年五十八

十七 山田 文祥

文祥前に章藏と稱す江戸の昌平學に入り又芳野金陵に従學し業大に進む歸りて藩立齊魯館及び縣立師範學校に教師となる明治十四年二月歿す享年三十七

十八 多々良 夢鶴 補山宗兩居士

夢鶴通稱宗右衛門四疊と號す屋號を本吉屋といふ家桐町人なり夢鶴に至り町年寄役を勤む夢鶴博識にして尤詩文に長じ風流を樂む天保九年二月歿す享年五十七

十九 紙屋 徳庵 徳庵宗榮居士

紙屋本姓中田氏先世尾張の人金澤の家柄町人にして町年寄役を勤む初代徳庵は長直法名は宗榮隱徳を尊一とし

貧民を救養するを終生の常行とす 承應二年四月歿す享年八十四

二十 越田 善七 釋善證

善七夙に阪井洗耳に就き規矩流の數學を修め其奧秘を極む後西洋數學を參酌研究して大に得る所あり而して洋算を學ぶ者唯理を究め應用を問はざるの弊あるを見て専ら力を應用算に致し日用の計算より山川の測量に至るまで之が捷徑を按出す維新以後中小各學校の敎職に在り尙私塾を開き諸生に敎ゆ著す所和算楷梯、新式算法等あり 明治四十二年十一月歿す

廿一 友田 安清

賈銅院本然原居士

安清夙に陶磁著書法を岩波玉山に、繪畫を幸野模嶺等に習ひ後洋式顔料使用法を納富

介次郎に、陶磁器製造法及陶磁器顔料調製法を獨逸人ワグネルに學び明治二十年陶磁器顔料の製造を創め遂に優等顔料百餘種を製出し又黃金製顔料を按出し需要海の内外に普ねし二十九年林屋組を起し硬質陶器の製造を始む即ち今の日本硬質會社の前身にして一時同社の技師長となる嘗て出石陶磁器試驗所長、石川縣工業學校敎諭たり 大正七年七月歿す享年五十七

廿二 上田 馬來

槐蔭院駿馬來居士

馬來通稱養元醫を業とし園亭、柿丸會、槐庵は其所居の名にて皆初世なり 寛政四年九月歿す享年五十四

廿三 永山 藤七郎

藤七郎諱は信守越中滑川の人幼より刀槍の術を好み年甫めて十三江戸に遊び劍道一傳

流の祖水野伴十郎に就き其奧秘を究む嘉永三年金澤に來り道場を開く門人五千餘明治十八年八月歿す享年六十一

廿四 井原 勝吉

勝吉は藩老本多氏の家臣なり永山藤七郎に就き水野一傳流刀法を學び竟に印可を受く本多政均家臣に勸め就きて學ばしむ後小將

組に進み武術を指教す明治の初道場を設く弟子千餘人 明治三十一年十一月歿す享年七十

廿五 宮崎 義比

義比夙に淺村又七郎に従ひ一刀流劍法を學び藩立雄飛館及壯猶館に擊劍を敎ゆ嘗て島根縣に來たり 明治三十一年七月歿す

書金澤墓誌後

予偶讀唐詩、子蘭句云、古塚密於草、又況千蓮句云、北邙不種田、但種松與栢、古來松栢摧以爲薪、古冢犂而成田、俗人之常也、蓋其人如無名草、而設種松栢也、苟其人如松栢、而其墓沒於茂草乎、則人雖不掃展、以加敬焉、金澤墓誌於是乎成、墓誌尙軒和田君所編、一日遠來、徵予一言、聞其所言、則誌中所錄、四百餘家、都是松栢之士、而況於吾鄉北邙之誌哉、於是乎言、己未歲初夏、書於洛北龍阜參雨軒、稼堂居士、

金澤墓誌與附

大正八年六月十日印刷
大正八年六月十五日發行

金澤市下傳馬町七十番地

編輯兼發行者 和田文次郎

金澤市南町三十五番地

發行所 加越能史談會

金澤市西町九十番地
明治印刷株式會社
印刷者 澤田助太郎

加越能史談會規約

第一條 本會ハ加越能三州ノ史料ヲ調査蒐集シ適當ノ方法ニ據リテ將來ニ傳ヘ史蹟ヲ顯開シテ其保存ヲ圖リ講演會ヲ公開シテ郷土ニ關スル史的研究ニ資スルヲ目的トスル事

(參考)史料保存の爲に毎年三四回宛「三州史料」を連続發行し會員に無代頒布し史蹟顯彰の爲に最初金澤市中に標榜を建設し追て市外に及ぼさんことを計畫し兩者共に實行致居候

第二條 本會ノ目的ヲ賛成セラル、ハ人ハ一時限リ會費金壹圓(最低額)以上ヲ隨意納入シテ會員タルコトヲ得但將來ニ於テ臨時ニ會費ヲ納入シ本會ノ事業ヲ資ケラルルハ固ヨリ妨ナキ事

(參考)三州史料印刷並標榜建設等向後積極的に事業の擴張を計るに從ひ經費を要すること不少に付當分毎年金壹圓以上の定額(隨意に決定)會費を納入相成度候

第三條 本會ニ幹事若干名ヲ置キ内常任幹事一名ハ庶務會計ヲ掌理シ毎年一回事務會計報告書ヲ作製シ尙會員ノ住所氏名及納金額ヲ記載シタル名簿ヲ會員ニ頒ツ事

(參考)大正七年九月會員の協議に依り會長を會員中より推薦し會務の綜理を委任することに致し本多政以男を會長に推薦致候

第四條 本會ハ新入會員ノ納入會費全部ヲ事業費ニ使用シ積極的ニ目的ノ遂行ヲ力ムト雖入會後臨時ノ納入會費ニシテ特ニ其使途ヲ明示セラレタルモノハ其指示ニ從フ事

(參考)第一條參考の趣旨に本づき當分本條の新入の二字に拘束不致候